# 実務経験のある教員等による授業科目の授業計画
# （シラバス）

| 科目名 | 看護情報学 | 時期 | 2年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(15 時間)、８回 |
| 科目の概要 | 看護における情報の意味と看護の質を向上するための文献検索とその活用方法について学ぶ。医療・看護の現場における電子カルテなどの病院情報管理システムの活用方法、データの倫理的取り扱いについて学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 看護における情報の意味と文献検索とその活用方法について理解する。<br>2 医療・看護における情報管理システムと情報倫理を理解する。 | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 別巻 看護研究, 医学書院<br>系統看護学講座 別巻 看護情報学, 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、課題レポート | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 看護における情報 | 1 看護における情報<br>1)看護ケアの提供に必要な情報 | 講義 | 専任教員 |
| 2～4 | 既存の情報の収集方法 | 2 既存の情報の収集方法<br>1)文献とその種類<br>2)文献の読み方<br>3)文献検索の方法<br>4)文献の引用について | 講義<br>演習:文献検索 | 専任教員 |
| 5･6 | 医療・看護における情報システム | 1 病院情報システム<br>1)入院患者ケアシステム<br>2)看護管理・業務支援システム<br>3)病棟管理・業務支援システム<br>4)医療過誤防止システム<br>5)クリニカルパス<br>6)DPC<br>7)医療用画像管理システム<br>8)院内ｅラーニングシステム | 講義 | 臨床看護師 |
| | | 2 新発田病院の電子カルテシステムの実際 | 演習:新発田病院の電子カルテシステムを用いた演習 | 臨床看護師 |
| 7 | 医療・看護における情報倫理 | 3 地域医療福祉のネットワークと情報システム<br>1)医療・介護・健康分野のネットワーク化の推進<br>2)地域医療福祉を支える要素<br>3)地域おける ICT 活用 | | 臨床看護師 |
| 8 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 医療と倫理 | 時期 | ２年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 医師、看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(15 時間)8 回 |
| 科目の概要 | 医療における倫理的諸問題を理解し、看護の対象者である人間の尊厳と権利を擁護する専門職種としての責務を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 医療における倫理的課題を理解する<br>2 看護専門職としての倫理について理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 別巻 看護倫理 医学書院　系統看護学講座 専門分野 看護学概論 医学書院<br>看護職の基本的責務 定義・概念/基本法/倫理 日本看護協会出版会 | | |
| 参考文献 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 倫理学の基本的な考え方 | 1 医療と倫理　2 医学の歴史<br>3 倫理のとらえ方　4 生命倫理の理論 | 講義 | 医師 |
| 2 | 先端医療と倫理 | 1 性と生殖の生命倫理<br>2 先端医療と制度　・移植医療、再生医療、遺伝子医療 | | |
| 3 | 死の生命倫理 | 1 死と医療<br>2 死についての生命倫理の課題 | | |
| 4 | 看護倫理とはなにか | 1 看護倫理を学ぶ意義<br>2 看護の倫理原則　3 看護実践上の倫理的概念 | 講義 | 専任教員 |
| 5 | 倫理的問題へのアプローチ | 1 倫理的問題へのアプローチ法<br>2 症例検討シート<br>3 事例におうじた看護倫理の問題と事例分析 | 講義<br>演習 | |
| 6・7 | 看護専門職の倫理 | 1 看護実践と倫理<br>2 専門職の倫理綱領<br>3 保健師助産師看護師法と倫理 | 講義<br>演習 | |
| 8 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 医療と法 | 時期 | ２年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 教職員他 | 単位(時間) 回数 | １単位(15 時間) ８回 |
| 科目の概要 | 我が国の保健医療福祉に関する諸制度の概要と規定する諸法令を理解する | | |
| 目 標 | １ 看護に関連する保健医療福祉及び労働に関する法令を理解する<br>２ 保健師助産師看護師法に規定されている看護職の資格･業務･責任について理解する | | |
| ディプロマ･ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携･協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門基礎分野 健康支援と社会保障制度〔4〕看護関係法令 医学書院<br>シンプル公衆衛生学2026,南江堂<br>看護職の基本的責務,日本看護協会出版会 | | |
| 参考文献 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～2 | 看護法 | １ 保健師助産師看護師法<br>２ 看護師等の人材確保の促進に関する法律 | 講義 | 専任教員 |
| 3 | 労働法と社会基盤 | １ 労働基準法<br>２ 労働安全保健法<br>３ 労働契約法 他 | 講義 | 事務職員1 |
| 4 | 医事法 | １ 医療法<br>２ 医療の資格に関する法律<br>・医師法 他<br>３ 医療を支える法<br>・医療介護総合確保法 他 | 講義 | 事務職員2 |
| 5 | 移植医療 | １ 臓器移植に関する法律 | 講義 | 外部講師1 |
| 6 | 保健衛生法 | １ 感染症に関する法 | 講義 | 外部講師2 |
| 7 | 薬務法 | １ 薬事一般に関する法律<br>２ 人などの組織を用いた医療関連法<br>３ 薬害被害者の救済など<br>４ 麻薬･毒薬など | 講義 | 外部講師3 |
| 8 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 看護学概論 | 時期 | １年次 前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)回数 | １単位(30 時間)15 回 |
| 科目の概要 | 看護とはなにか、看護師とはどのような職業かを学ぶ。また、看護の対象である人間、そして健康への理解を深め、対象の自然の回復力を促すケアの考え方、さらに看護を目指す者としての倫理観の必要性について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 看護の概念を学び、看護の本質を探究しその役割を理解する<br>2 看護の対象としての人間を理解する<br>3 健康の概念、捉え方について理解する<br>4 看護における倫理の必要性を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[1] 看護学概論 医学書院<br>看護職の基本的責務 定義・概念／基本法／倫理 日本看護協会出版会<br>看護覚え書 現代社<br>看護の基本となるもの 日本看護協会出版会 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方 法 |
|---|---|---|---|
| 1 | 看護とは | 1 看護の本質<br>2 看護の定義<br>3 看護の役割と機能 | 講義 |
| 2～3 | 看護の対象としての人間の理解 | 1 人間のこころとからだ<br>2 人間の「暮らし」の理解 | 講義・演習 |
| 4～5 | 人間の健康状態と生活 | 1 健康のとらえ方<br>2 国民の健康状態<br>3 国民のライフサイクル | 講義 |
| 6 | 看護の提供者 | 1 職業としての看護 ・近代日本の看護<br>2 看護職の資格と養成にかかわる制度<br>3 看護職者の就業状況、継続教育とキャリア開発 | 講義 |
| 7 | 看護における倫理 | 1 現代社会と倫理<br>2 医療をめぐる倫理の歴史的経緯と看護倫理<br>3 看護の本質としての看護倫理 | 講義 |
| 8 | 看護の提供の仕組み | 1 サービスとしての看護<br>2 看護サービスの提供の場<br>3 看護の質の保証<br>4 看護実践とその質保証に必要な要件 | 講義 |
| 9～14 | 看護理論と概念 | 1 主な看護理論家の理論<br>2 ヘンダーソン「看護の基本となるもの」の読解<br>3 世界の看護の歴史とナイチンゲールの功績<br>4 ナイチンゲール「看護覚え書」の読解 | 講義・演習 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 看護過程 | 時期 | 1年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 看護過程の基盤となる考え方と看護実践方法としての看護過程のプロセスと展開方法について学ぶ。また、看護実践に必要な看護記録と、その法的根拠を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 対象の健康問題を解決するための看護過程について基本的知識・技術を修得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ 医学書院<br>看護過程に沿った対症看護 病態生理と看護のポイント 第５版 学研<br>ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断 第６版 ヌーベルヒロカワ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～2 | 看護過程とは | 1 看護過程の意義<br>・5 つの構成要素<br>2 看護過程展開の基盤となる考え方<br>1）問題解決過程<br>2）クリティカルシンキング<br>3）リフレクション | 講義 |
| 3～6 | アセスメント<br>（情報収集と分析） | 3 看護過程の展開<br>1）情報の収集と分析<br>・ 情報収集の方法 情報源 手段 情報の種類・整理<br>・情報分析の進め方<br>2)アセスメントの枠組み<br>・ゴードンの機能的健康パターンの意味と分析の視点 | 講義<br>事例を用いた<br>演習 |
| 7～9 | 全体像の把握と看護問題の明確化 | 3）全体像の把握<br>・関連図とは<br>4）看護問題の明確化<br>・看護が取り扱う問題 ・明確化のプロセス<br>・看護問題と看護診断 ・看護問題の種類と表記方法<br>・看護問題の優先順位 | 講義<br>事例を用いた<br>演習 |
| 10～12 | 看護計画<br><br>実施と評価 | 5）看護計画<br>・期待される成果 看護目標の設定(認知、精神運動、情意)<br>・看護計画の立案<br>6）実施・評価<br>・実施の流れ ・評価の方法 | 講義<br>事例を用いた<br>演習 |
| 13・14 | 看護記録 | 4 看護記録<br>1）看護記録とは<br>・看護記録の法的位置づけ ・目的、機能<br>・記載・管理における留意点<br>2）看護記録の構成<br>・基本情報<br>・経過記録(SOAP式、フォーカスチャーティング)<br>・看護サマリー | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 共通基本技術 | 時期 | 1年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | 看護技術の特徴やコミュニケーションの基本的な方法、医療における安全確保、安楽確保、学習支援について、その意義を理解し、基本的な知識と技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 看護技術を学ぶ意義を理解する<br>2 人間関係成立のためのコミュニケーションの基本的な方法を理解する<br>3 医療における安全確保・安楽確保の意義と基本的な援助技術を修得する<br>4 学習支援の意義と看護の役割・方法を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1.豊かな人間力　☑ 2.看護を実践する力　☑ 3.探求する力　☑ 4.連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ，医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ ，医学書院<br>根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ　スタンダードプリコーションに基づく手洗い(57)、必要な防護用具(手袋、ゴーグル、ガウン等)の選択・着脱(58)、感染性廃棄物の取り扱い(60)、患者の誤認防止実施(64) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1･2 | 看護技術とは | 1 看護技術の特徴・範囲<br>2 看護技術実践のための要素 | 専任教員<br>講義 |
| 3～5 | コミュニケーション | 1 コミュニケーションの意義と目的・構成要素・成立過程<br>2 関係構築に向けた基本技術と効果的な技術<br>3 コミュニケーション障害がある人への対応 | |
| 6～11 | 安全確保の技術 | 1 安全確保の基礎知識<br>2 感染防止の技術<br>1)感染とその予防の基礎知識<br>2)標準予防策(スタンダードプリコーション)<br>3)感染経路別予防策<br>4)医療感染性廃棄物の取り扱い<br>3 患者誤認防止<br>4 転倒・転落防止 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>57.58<br>60.64 |
| 12 | | 1 標準予防策(スタンダードプリコーション) | 技術確認<br>レベルⅠ<br>64. 57.58 |
| 13 | 学習支援 | 1 学習支援の対象者と看護の役割<br>2 学習支援の基礎知識<br>3 学習支援の方法 | 講義 |
| 14 | 苦痛の緩和・安楽確保の技術 | 1 安楽をもたらす身体ケア<br>1)援助の基礎知識<br>2)援助の実際 | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | ヘルスアセスメント | 時期 | 1年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 対象の健康状態を客観的かつ正確に把握するために、身体の情報を得てアセスメントする基本的な知識と技術を学ぶ | | |
| 目 標 | 1 ヘルスアセスメントの意義と目的を理解し、その方法を修得する<br>2 ヘルスアセスメントによって得られた結果を分析・解釈する意義を理解し、その方法を修得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ ，医学書院<br>根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術, 医学書院<br>写真でわかる看護のためのフィジカルアセスメント アドバンス, インターメディカ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ　バイタルサインの測定(50)、身体計測(51)、フィジカルアセスメント(52) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1 | ヘルスアセスメントとは | 1 ヘルスアセスメントがもつ意味<br>2 ヘルスアセスメントにおける観察<br>3 ヘルスアセスメントにおける重要な視点 | 講義 |
| 2･3 | フィジカルアセスメント | 1 健康歴とセルフケア能力のアセスメント<br>2 フィジカルアセスメントに必要な技術<br>問診・視診・触診・聴診・打診<br>3 全身状態・全体印象の把握<br>4 身体計測の方法と意義 | 講義 |
| 4～9 | バイタルサイン | 1 バイタルサインの観察とアセスメント<br>1)バイタルサインとは<br>2)測定方法とアセスメント<br>・体温・脈拍・呼吸・血圧・意識・SPO2<br>3)バイタルサインの記録・報告 | 講義、演習<br>レベルⅠ<br>50 |
| 10 | | 1 バイタルサイン測定<br>1)体温測定 2)血圧測定 3)呼吸測定 4)脈拍測定 | 技術確認<br>レベルⅠ<br>50 |
| 11～14 | 系統的フィジカルアセスメント | 1 ケアにつなげるフィジカルアセスメント<br>2 系統別フィジカルアセスメントの実際<br>呼吸器系、循環器系、腹部(消化器系)、筋骨格系、<br>1) 各フィジカルアセスメントの目的<br>2) 各フィジカルアセスメントに必要な基礎知識<br>3) 各フィジカルアセスメントの方法<br>3 心理・社会状態のアセスメント | 講義、演習<br>レベルⅠ<br>51 52 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 臨床判断 | 時期 | ２年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(15 時間) ８回 |
| 科目の概要 | 臨床場面における状況を適切に判断し、対象の変化に応じた看護を実践する基礎的な考え方を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 看護実践の場で行われている流動的かつ柔軟な判断・対処の実際を理解し、その基礎的な方法を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[4] 臨床看護総論　医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート　演習・出席状況から総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 臨床判断とは<br><br>臨床判断モデル | 1 臨床判断と臨床推論<br>1)看護過程、臨床判断、臨床推論の関係<br><br>2 臨床判断の構成概念<br>1)臨床判断モデル<br>タナーの臨床判断モデル<br>2)臨床判断のプロセス<br>・気づき ・解釈 ・反応 ・省察 | 講義 | 専任教員 |
| 2 | 臨床判断モデルを取り入れた気づきと解釈の学習 | 1 事例による学習<br>1)気づき<br>2)解釈<br>・分析的推論 ・直観的推論 ・説話的推論 | 講義 | 専任教員 |
| 3・4 | 事例による臨床判断の実践 | 1 臨床判断モデルを取り入れた事例演習<br>1)気づきの実践とリフレクション<br>2)解釈の実践とリフレクション | 演習 | 専任教員 |
| 5 | 臨床判断モデルを取り入れた臨床場面の判断 | 1 臨床場面で遭遇する場面に応じた臨床判断 | 講義 | 臨床看護師 |
| 6・7 | 臨床判断モデルを取り入れた実践展開(演習) | 1 事例による臨床判断モデルを取り入れた実践<br>1)気づきの実践とリフレクション<br>2)解釈の実践とリフレクション<br>2 事例における臨床看護師の臨床判断<br>1)臨床看護師の気づき<br>2)臨床看護師の解釈<br>3 全体をとおしたリフレクション<br>1)その場面に必要な知識<br>2)看護師の視点で考える | 演習・講義 | 臨床看護師<br>専任教員 |
| 8 | 終了試験 | | | |

| 科目名 | 生活の援助技術Ⅰ | 時期 | １年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 環境の調整と活動の意義を理解し、安全・安楽・自立の視点で対象の健康を促進するための、基本的技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 対象の生活を整えるための環境および活動と休息の援助技術を修得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ　医学書院<br>根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術　医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 快適な療養環境の整備(1)、臥床患者のリネン交換(2)、車椅子での移送(13)、歩行・移動介助(14)、移乗介助(15)、体位変換・保持(16)、ストレッチャー移送(18)、安楽な体位の調整(69)<br>レベルⅡ 安全な療養環境の整備(転倒・転落・外傷予防)(65) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1･2 | 環境調整技術 | 1 環境調整の援助の基礎知識<br>1)環境と看護<br>2)病床の環境(病床の環境をとらえる視点・病床・病室)<br>光・音・温度・湿度・気流・においと空気の清浄性・色彩・プライバシーの保護とパーソナルスペースの確保 | 講義 |
| 3～7 | | 2 環境調整の援助の実際<br>1)病床の環境整備<br>2)ベッドメーキング<br>3)臥床患者のシーツ交換 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>1 |
| 8～12 | 活動・休息援助技術 | 1 基本的活動の援助、基本的活動の基礎知識<br>1)姿勢<br>2)身体不活動による影響とその予防<br>3)ボディメカニクス<br>2 基本的活動の援助の実際<br>1)体位変換<br>2)歩行の援助<br>3)移乗・移送<br>3 苦痛の緩和・安楽確保の技術<br>1)体位保持(ポジショニング) | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>13.14.15.16.<br>18.69 |
| 13 | 睡眠・休息の援助 | 1 睡眠・休息の援助の基礎知識<br>1)睡眠の種類<br>2)睡眠制御のメカニズム<br>3)睡眠のアセスメント<br>2 援助の実際 | 講義 |
| 14 | | 1 臥床患者のシーツ交換 | 技術確認<br>レベルⅠ<br>2<br>レベルⅡ<br>65 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 生活の援助技術Ⅱ | 時期 | １年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 食生活と排泄行動を理解し、安全・安楽・自立の視点で対象の健康を促進するために必要な基礎的技術を学ぶ | | |
| 目 標 | 1 食事の意義を理解し、基礎的な食事摂取への援助技術を修得する。<br>2 排泄の意義を理解し、基礎的な排泄の介助と排泄促進への援助技術を修得する。 | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院<br>根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 任 和子 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 食事介助(嚥下障害のある患者を除く)(3)、<br>排泄援助(床上、ポータブルトイレ、オムツ等)(7)、膀胱留置カテーテルの管理(8)、浣腸(10)<br>レベルⅡ 導尿または膀胱留置カテーテルの挿入(9) | | |
| 評 価 | 筆記試験 技術演習 課題レポート　演習・出席状況から総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～3 | 食事の援助 | 1 食事と栄養の意義<br>2 栄養状態および摂取能力、食欲や食に対する認識のアセスメント<br>1）栄養状態<br>2）水分・電解質バランス<br>3）食欲<br>4）摂食・嚥下能力<br>5)食生活変更の必要性、患者の認識・行動のアセスメント<br>3 医療施設で提供される食事の種類と形態<br>4 食事摂取の介助<br>5 非経口的栄養摂取の援助<br>1）経管栄養法<br>2）中心静脈栄養法 | 講義 |
| 4・5 | | 6 食事摂取の介助 | 演習<br>レベルⅠ<br>3 |
| 6 | 排泄の援助 | 1 自然排尿および自然排便の基礎知識<br>1）排泄の意義<br>2）排泄器官の機能と排泄のメカニズム<br>3）アセスメント | 講義 |
| 7・8 | | 2 自然排尿および自然排便の介助の実際<br>1）トイレにおける排泄介助<br>2）床上排泄援助<br>3）おむつによる排泄援助 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>7 |
| 9～11 | | 3 排便を促す援助<br>1）排便を促す援助の基礎知識<br>2）浣腸(グリセリン浣腸) | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>10 |
| 12～14 | | 4 導尿<br>1）一時的導尿<br>2）持続的導尿 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>8<br>レベルⅡ<br>9 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 生活の援助技術Ⅲ | 時期 | 1年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | 清潔・衣生活の援助を行う意義を理解し、安全・安楽・自立の視点で対象の健康を促進するために必要な基本的技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 対象の生活を整えるための衣生活の援助技術を修得する<br>2 対象の生活を整えるための清潔の援助技術を修得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院<br>根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 任和子 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ　足浴・手浴(19)、整容(20)、点滴・ドレーンなどを留置していない患者の寝衣交換(21)<br>入浴・シャワー浴の介助(22)、陰部の保清(23)、清拭(24)、洗髪(25)、口腔ケア(26) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1･2 | 清潔・整容の意義 | 1 清潔援助の基礎知識<br>1）皮膚・粘膜・口腔内の構造と機能<br>2）清潔援助の効果<br>3）清潔に関するニーズのアセスメント | 講義 |
| 3･4 | 衣生活の援助 | 2 衣生活援助の基礎知識<br>1）衣服を用いることの意義<br>2）対象の状態に応じた衣服の選択<br>3）衣生活に関するニーズのアセスメント<br>4） 寝衣交換の目的と援助方法・留意点<br>・臥床での寝衣交換の援助<br>・障害のある場合の寝衣交換の援助 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>21 |
| 5･6 | 清潔の援助 | 3 清潔援助の基礎知識<br>1）入浴・シャワー浴の目的と援助方法・留意点<br>2）清拭の目的と援助方法・留意点<br>・臥床での全身清拭の援助 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>22･24 |
| 7･8 | | 3）洗髪の援助の目的と援助方法・留意点<br>・ケリーパッド　・吸水パッド　・洗髪車　・洗髪台 | レベルⅠ<br>25 |
| 9･10 | | 4）部分浴の援助の目的と援助方法・留意点<br>・手浴・足浴の援助<br>5）整容の援助の目的と援助方法・留意点<br>・洗面(顔面清拭)の援助　・爪切り　・髭剃り | レベルⅠ<br>19<br>20 |
| 11･12 | | 6）口腔ケアの援助の目的と援助方法・留意点<br>・歯ブラシとスポンジブラシを用いた口腔ケアの援助<br>・義歯のケア | レベルⅠ<br>26 |
| 13･14 | | 7）陰部洗浄の援助の目的と援助方法・留意点<br>・陰部洗浄の援助 | レベルⅠ<br>23 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 診療の補助技術Ⅰ | 時期 | 1年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30時間)、15回 |
| 科目の概要 | 診療・治療に伴う看護技術の意義を理解し、安全・安楽に留意した診察・検査・処置に必要な基本的な知識・技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1　生体情報を把握するための知識に基づき、症状・生体機能管理の技術を修得する<br>2　診察・検査・処置を受ける対象の基本的な看護を理解する<br>3　与薬の基礎知識に基づき、安全な与薬の技術を修得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院<br>系統看護学講座 別巻 臨床検査 医学書院<br>ナーシング・グラフィカ 医療安全 メディカ出版<br>根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ　経皮・外用薬の投与(39)、検体(尿、血液等)の取り扱い(53)、検査の介助ができる(56)、<br>針刺し事故の防止・事故後の対応(62)、患者誤認防止策の実施(64)<br>レベルⅡ　経口薬の投与(38)、坐薬の投与(40)、皮下注射(41)、筋肉内注射(42)、<br>静脈路確保・点滴静脈内注射(43)、点滴静脈内注射の管理(44)、静脈血採血(55) | | |
| 評 価 | 筆記試験、演習、課題レポート、出席状況などを総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～5 | 症状・生体機能管理技術 | 1 検体検査の目的と種類<br>1)血液検査　2)尿検査<br>3)便検査　4)喀痰検査<br>2 診療・検査・処置時の看護師の役割<br>3 検査・処置を受ける対象の看護<br>1)X線撮影　2)コンピュター断層撮影<br>3)磁気共鳴映像　4)内視鏡検査<br>5)超音波検査　6)肺機能検査<br>7)核医学検査　8)穿刺<br>4 血液検査(静脈血採血)の実施 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>53・56・62<br>64<br>レベルⅡ<br>55 |
| 6～8 | 与薬の技術 | 1 与薬の基礎知識<br>2 経口与薬法<br>1)内服　2)口腔内与薬法<br>3 その他の与薬法<br>1)経皮的与薬　2)直腸内与薬<br>3)点眼　4)点鼻<br>5)吸入 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>39・64<br>レベルⅡ<br>38・40 |
| 9～14 | | 4 注射法<br>1)注射の準備<br>①注射筒と注射針 ②薬液の吸い上げ<br>2)注射の実施<br>①皮下注射 ②皮内注射 ③筋肉内注射<br>④静脈内注射 ⑤点滴静脈内注射 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>62・64<br>レベルⅡ<br>41・42・43・44 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 診療の補助技術Ⅱ | 時期 | 1年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 診療の補助行為に関わる援助方法の基本について学ぶ。<br>検査及び治療、創傷管理等が必要な対象者に対して、安全・安楽な療養生活を支援するための援助方法を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 4　身体症状に応じた、基本的な看護援助技術や対処方法を修得する<br>5　医療機器・器具の原理を理解し、安全に取り扱うための方法を修得する<br>6　援助や検査時の看護の役割について理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ ，医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ ，医学書院<br>根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院<br>写真でわかる臨床看護技術２アドバンス インターメディカ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 体温調整の援助(29)、酸素吸入療法の実施(30)、ネブライザーを用いた気道内加湿(31)、体位ドレナージ(34)、使用した器具の感染防止の取り扱い(59)、無菌操作(61)、安楽の促進・苦痛の緩和のためのケア(70)<br>レベルⅡ 口腔内・鼻腔内吸引(32)、褥瘡予防ケア(35)、創傷処置(創洗浄, 創保護, 包帯法)(36) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～3 | 感染防止の技術 | 1 感染経路別予防策<br>2 医療施設における感染管理<br>3 洗浄・消毒・滅菌<br>4 無菌操作 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>59・61 | 専任教員 |
| 4・5 | 創傷管理技術 | 1 創傷管理の基礎知識<br>2 創傷処置<br>3 包帯法 | 講義・演習<br>レベルⅡ<br>36 | 専任教員 |
| 6・7 | | 4 褥瘡予防ケア<br>5 褥瘡ケア | 講義・演習<br>レベルⅡ<br>35 | 臨床看護師 |
| 8～10 | 呼吸を整える技術 | 1 気道管理<br>1)気道管理の基礎知識<br>2)排痰ケア<br>2 気道管理の援助の実際<br>1)呼吸を楽にする方法<br>2)安楽な呼吸法<br>3)体位ドレナージ(咳嗽介助・ハフィング含む)<br>4)吸入<br>5)吸引(一次的吸引:鼻腔 口腔) | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>31.34<br>レベルⅡ<br>32 | 専任教員 |
| 11・12 | | 3 酸素療法<br>4 人工呼吸療法 | レベルⅠ<br>30 | |
| 13・14 | 循環を整える技術 | 1 体温管理の技術<br>2 末梢循環促進ケア | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>29、70 | 専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | |

| 科目名 | 臨床看護総論 | 時期 | 2年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 基礎的知識と技術を統合し、ライフサイクル、健康状態、症状、治療を含めた看護の対象者の状況の理解を深め、実際の看護実践につながる思考と援助内容・方法を学ぶ | | |
| 目 標 | 1 健康状態の経過の特徴とそれに基づく看護を理解する。<br>2 主要症状を示す対象への看護を理解する。<br>3 治療を受ける対象の看護を理解する。 | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[4] 臨床看護学総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院<br>根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院<br>系統看護学講座 別巻 臨床放射線医学 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験・課題レポート・出席状況から総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～4 | 健康上のニーズをもつ対象者と家族への看護 | 1 ライフサイクルからとらえた対象者と家族の健康上のニーズ<br>2 家族の機能からとらえた対象者と家族の健康上のニーズ<br>3 人々の暮らしからとらえた健康上のニーズとケアサービスの拠点 | 講義 |
| | 健康状態の経過に基づく看護 | 1 健康状態と看護<br>2 健康の維持・増進を目ざす時期の看護<br>3 急性期・回復期・慢性期・終末期における看護 | |
| 5～7 | 主要症状を示す対象者への看護 | 1 呼吸に関連する症状を示す対象者への看護 ・呼吸機能障害<br>2 循環に関連する症状を示す対象者への看護 ・循環障害<br>3 安楽に関連する症状を示す対象者への看護 ・痛み・吐き気・嘔吐 | 講義 |
| 8～9 | 輸液療法を受ける対象者への看護 | 1 輸液療法の目的と特徴<br>2 輸液療法(中心静脈栄養栄養法を含む)を受ける対象者への援助 | 講義 |
| 10～11 | 化学療法を受ける対象者への看護 | 1 化学療法の目的と特徴<br>2 抗がん薬曝露からの防護<br>3 化学療法を受ける対象者への援助<br>・治療前・薬剤投与時・薬剤投与後 | 講義 |
| 12 | 放射線療法を受ける対象者への看護 | 1 放射線療法の目的と特徴<br>2 放射線被爆からの防護(医療者の安全)<br>3 放射線療法を受ける対象者への看護援助<br>・照射時・照射後 | 講義 |
| 13 ～14 | 輸血管理 | 1 輸血の目的・種類<br>2 血液製剤の種類と取り扱い上の注意点<br>3 輸血管理の実施と患者の看護援助<br>・治療前・治療中・治療後の支援・副作用・合併症 | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 臨床看護の実践Ⅰ | 時期 | ２年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師、臨床工学技士 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間)、15 回 |
| 科目の概要 | 臨床場面を想定したシミュレーション演習を通して、これまでに学んだ知識や技術を統合し、対象に合わせた安全・安楽な看護を実践するための基礎的能力を養う。また、突発的な事態発生時や医療機器使用時に求められる基本的な知識・技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | １ 事例患者の状態や状況に応じて必要な看護を判断し、安全・安楽・自立に配慮した看護技術を修得する<br>２ 心肺蘇生法・応急手当についての基本的な看護技術を修得する<br>３ 医療機器の特徴を理解し、医療機器を使用する患者の基本的な看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[4] 臨床看護総論 医学書院<br>根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院<br>写真で分かる 臨床看護技術２アドバンス インターメディカ | | |
| 技術経験録(No)<br>演習項目 | レベルⅠ 点滴ドレーン等を留置している患者の寝衣交換(27)、緊急時の応援要請(47)、一次救命処置(BLS)(48)、止血法の実施(49)<br>レベルⅡ 気管内吸引(33)、医療機器(輸液ポンプ、シリンジポンプ、心電図モニター、人工呼吸器等)の操作・管理(68) | | |
| 評 価 | 筆記試験、演習、課題レポート、出席状況などを総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～4 | 多重課題をもつ患者の看護実践 | １ 事例患者の状況に応じた看護実践<br>1)点滴やドレーン等を留置している患者の寝衣交換 | 講義・演習<br>レベルⅠ27 | 専任教員 |
| 5～8 | 救命救急処置が必要な患者の看護実践 | １ 救命救急処置の基礎知識<br>1)救急対応の考え方<br>2)救急・急変時における初期対応<br>3)トリアージ<br>２ 心肺蘇生法<br>1)心肺蘇生法の基礎知識<br>2)一次救命処置の実際<br>3)二次救命処置について<br>３ 止血法<br>４ 急変時の対応 | 講義・演習<br>レベルⅠ47<br>レベルⅠ48<br>レベルⅠ49 | 臨床看護師 |
| 9～10 | 医療機器の概要と取り扱い | １ 医療機器の概要<br>２ 医療機器の取り扱い<br>1)輸液ポンプ・シリンジポンプ<br>2)心電図モニター<br>3)人工呼吸器<br>4)除細動器 | 講義・演習<br>レベルⅡ68 | 臨床工学技士 |
| 11～14 | 医療機器を使用する患者の看護実践 | １ 医療機器に関するインシデントとその予防策<br>２ 看護の実践<br>1)輸液ポンプ・シリンジポンプ使用中の看護<br>2)人工呼吸器を装着中の看護・挿管中の気管内吸引 | 講義・演習<br>レベルⅡ33 | 専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 地域・在宅看護概論 | 時期 | 1年次 後期 |
|---|---|---|---|
| 講師 | 看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | 1単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | 地域・在宅看護が推進されている社会的背景を踏まえ、在宅看護を必要とする対象の特徴と医療・介護・福祉の連携システムを理解し、地域・在宅看護の基盤となる考え方を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 地域・在宅看護が必要とされる社会的背景と地域・在宅看護の概念について理解する<br>2 地域・在宅看護の対象者の特徴について理解する<br>3 地域・在宅看護と医療・介護・福祉との連携システムについて理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1.豊かな人間力 ☑ 2.看護を実践する力 ☑ 3.探求する力 ☑ 4.連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論① 地域療養を支えるケア メディカ出版<br>国民衛生の動向 厚生統計協会 | | |
| 技術経験録演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、出席状況・態度、課題レポートなどを総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方 法 |
|---|---|---|---|
| 1～3 | 地域・在宅看護の概念 | 1 地域と生活と健康<br>2 地域アセスメント<br>3 地域看護と在宅看護<br>4 地域・在宅看護の背景<br>5 多様な場で提供される地域看護の実践<br>6 地域療養を支える在宅看護の役割・機能<br>1)パートナーシップ 4)ケアマネジメント<br>2)意思決定支援 5)ヘルスプロモーション<br>3)自立支援 6)多職種・多機関の連携<br>7 地域・在宅看護における倫理 | 講義 |
| 4～7 | 地域・在宅看護の対象者 | 1 小児期、成人期、老年期のライフステージからみた対象者<br>2 疾患・障害・健康レベルからみた対象者<br>3 在宅療養の場における家族のとらえ方<br>1)家族の定義 3)家族発達理論・家族システム理論<br>2)家族の機能・役割 | 講義 |
| 8～14 | 地域包括ケアシステムにおける多職種・多機関連携 | 1 医療機関との連携<br>1)退院支援と退院調整 4)継続看護の重要性<br>2)院内外の多職種連携 5)地域におけるネットワークシステム<br>3)退院前カンファレンス 6)地域連携クリニカルパス<br>2 地域包括ケアシステムと共生社会<br>1)地域包括ケアシステムにおける四つの“助け”<br>2)多様な場における地域包括システム<br>3 保健医療・福祉連携機関と連携<br>1)在宅ケアで連携する関連職種<br>2)地域包括支援センターの機能・役割<br>3)地域ケア会議<br>4)居宅介護支援事業所の機能・役割<br>5)サービス担当者会議 | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 」科目名 | 地域・在宅看護Ⅰ | 時期 | ２年次 前期 |
|---|---|---|---|
| 講師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(15 時間) ８回 |
| 科目の概要 | 地域で療養する対象のニーズと在宅療養を支える法・制度を体系的に理解し、社会資源の活用における看護職の役割について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 地域・在宅看護にかかわる法・制度や社会資源の活用方法を理解する<br>2 訪問看護制度の変遷と仕組みについて理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論① 地域療養を支えるケア メディカ出版<br>国民衛生の動向 厚生統計協会 | | |
| 技術経験録演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、出席状況・態度、課題レポートなどを総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方 法 |
|---|---|---|---|
| 1～5 | 地域療養を支える法・制度 | 1 地域療養を支える社会資源(人・機関・サービス)の種類<br>2 社会資源の活用における看護職種の役割<br>3 医療保険制度<br>4 介護保険制度<br>5 生活保護制度<br>6 障害をもつ在宅療養者を支える社会資源<br>1)障害者総合支援法<br>2)精神保健福祉法<br>3)発達障害者支援法<br>4)障害者を支える手当・年金<br>7 難病をもつ在宅療養者を支える社会資源<br>1)難病法による医療費助成制度<br>2)難病に対する療養生活の環境整備と対策<br>8 子どもの在宅療養を支える社会資源<br>1)小児慢性特定疾患対策<br>2)療育医療<br>3)子供の在宅療養を支える手当<br>9 高齢者の在宅療養を支える社会資源<br>1)後期高齢者医療制度 4)日常生活自立支援事業<br>2)高齢者・認知症に対する施策 5)成年後見制度<br>3)高齢者虐待防止法 | 講義 |
| 6・7 | 訪問看護制度 | 1 訪問看護制度の変遷<br>2 訪問看護制度の仕組み<br>1)訪問看護ステーションの開設基準<br>2)訪問看護の従事者と対象者<br>3)訪問看護のサービス内容<br>4)訪問看護サービス開始までの流れ<br>5)訪問看護の利用料<br>6)介護保険法・健康保険法に基づく訪問看護<br>7)訪問看護制度の課題 | 講義 |
| 8 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 地域・在宅看護Ⅱ | 時期 | ２年次 前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講師 | 訪問看護師 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 訪問看護における看護過程の特徴を理解し、事例を通して多様なライフステージ・疾患・健康レベルにある療養者と家族の生活上の課題を捉え、在宅における看護過程の展開方法を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 訪問看護における看護過程の特徴とその実際を理解する<br>2 事例を通し、多様なライフステージ、健康レベルに応じた在宅における看護過程の展開方法を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1.豊かな人間力 ☑ 2.看護を実践する力 ☑ 3.探求する力 ☑ 4.連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論① 地域療養を支えるケア メディカ出版<br>ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論② 在宅療養を支える技術 メディカ出版<br>強みと弱みからみた 地域・在宅看護過程＋総合的機能関連図 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、出席状況、グループワークの課題、プレゼンテーションなどを総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方 法 |
|---|---|---|---|
| 1～4 | 在宅療養における看護過程の展開技術 | 1 訪問看護における看護過程の特徴<br>1)療養者・家族の生き方や思いに応じたゴール設定と見直し<br>2)生活の場に合わせた医療的ケアの展開<br>3)家族成員のケア<br>4)療養環境や周囲の人の調整<br>5)介護力・経済力・価値観に応じた社会資源の活用の提案<br>2 在宅におけるヘルスアセスメント<br>3 在宅療養における情報収集とアセスメント<br>1)本人・家族の思いと期待 7)多職種との連携<br>2)治療・療育方針 8)住民との連携<br>3)現在に至る生活状況 9)生活環境<br>4)医療ニーズと医療提供状況 10)社会資源の活用状況<br>5)心身の状況 11)危機管理状況<br>6)家族と介護状況<br>4 在宅療養における看護過程の展開<br>1)ゴール設定における優先順位<br>2)1日、1週間、1か月単位での計画<br>3)療養者・家族の強みや特徴を生かした計画 | 講義<br><br>講義・演習 |
| | 訪問看護の記録 | 1 訪問看護記録の意義<br>2 訪問看護で使用する記録<br>3 訪問看護記録を記入するときの留意点 | |
| 5～14 | 在宅における療養者と家族の看護過程の展開 | 1 脳血管疾患をもつ療養者の事例展開<br>2 認知症高齢者と介護する家族の事例展開<br>3 筋委縮性側索硬化症(ALS)の療養者の事例展開<br>4 がん終末期の療養者の事例展開<br>5 事故による中途障害(脊髄損傷)がある療養者の事例展開<br>6 精神障害をもつ療養者の事例展開<br>7 重度心身障害児と家族の事例展開 | |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 地域・在宅看護Ⅲ | 時期 | ２年次 前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 在宅療養を支える訪問看護技術の基本を理解し、多様なライフステージ・疾患・健康レベルにある療養者・家族が抱える生活上の課題を捉え、日常生活の支える在宅看護について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 訪問看護の特徴や役割を捉え、在宅療養を支える基本的な訪問看護技術を理解する<br>2 療養者と家族の日常生活の自立支援・安全管理に向けた支援を理解する<br>3 ライフステージ・疾患・健康レベルを踏まえ、多様性・複雑性をもつ対象の療養生活を支援する看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論① 地域療養を支えるケア メディカ出版<br>ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論② 地域療養を支える技術 メディカ出版<br>強みと弱みからみた 地域・在宅看護過程＋総合的機能関連図 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 摘便(11) | | |
| 評 価 | 筆記試験、出席状況・態度、課題レポートなどを総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方 法 |
|---|---|---|---|
| 1～4 | 在宅療養生活を支える基本的な訪問看護技術 | 1 訪問看護における看護職の役割<br>2 家庭訪問・初回訪問<br>3 訪問看護における留意点<br>4 在宅療養を支えるとコミュニケーションの基本と支援<br>5 在宅におけるアセスメント技術 | 講義 |
| | | 6 日常生活を支える看護技術<br>1)環境整備 4)食生活 7)清潔<br>2)生活リハビリテーション 5)排泄 8)睡眠<br>3)肢位の保持と移動 6)呼吸 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>11 |
| 5・6 | 症状に応じた看護技術と日常生活における安全管理 | 1 症状に応じた看護技術<br>1)発熱 2)消化器症状 3)疼痛 4)呼吸困難感<br>2 在宅看護におけるリスクマネジメント<br>1)転倒 4)熱傷・凍傷 7)感染(疥癬・感染性胃腸炎)<br>2)誤嚥・窒息 5)熱中症<br>3)溺水 6)脱水症 | 講義 |
| 7～14 | ライフステージ・疾患・病期・障害に応じた在宅看護 | 1 障害をもつ在宅療養者と家族の看護<br>1)脳血管疾患 2)脊髄障害<br>2 難病をもつ在宅療養者と家族の看護<br>1)ALS 2)パーキンソン病<br>3 慢性期にある在宅療養者と家族の看護<br>1)心不全 2)COPD 3)糖尿病<br>4 認知症がある高齢の在宅療養者と家族の看護<br>5 在宅療養を要する子どもと家族の看護<br>1)医療的ケア児 2)重症心身障害児<br>6 急性増悪した在宅療養者と家族の看護<br>7 終末期にある在宅療養者と家族の看護<br>1)ACP 2)維持期・悪化期・臨死期への支援 3)グリーフケア | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 地域・在宅看護Ⅳ | 時期 | ２年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | ２単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 在宅療養を支える医療ケアの原理原則を理解し、在宅看護に必要な医療ケアの知識と在宅療養における健康危機管理、災害対策について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 在宅療養を支える医療的ケアの原理原則を理解する<br>2 在宅における医療的ケアの自立支援・安全管理を踏まえた療養者・家族への指導・支援方法を理解する<br>3 在宅療養を支える健康危機管理・災害対策と訪問看護師の役割について理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論① 地域療養を支えるケア メディカ出版<br>ナーシング・グラフィカ 地域・在宅看護論② 在宅療養を支える技術 メディカ出版<br>新改訂 写真でわかる訪問看護アドバンス インターメディカ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 経管栄養法による流動食の注入(5)、経鼻胃チューブの挿入(6) | | |
| 評 価 | 筆記試験、出席状況・態度、課題レポートなどを総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方 法 |
|---|---|---|---|
| 1～12 | 在宅療養を支える医療ケア | 1 医療ケアの原理原則<br>1)セルフマネジメント<br>2)リスクマネジメント<br>3)多機関・多職種との連携<br>4)社会資源の活用・調整<br>2 薬物療法<br>1)服薬管理　2)がん外来化学療法　3)疼痛管理<br>3 インスリン自己注射<br>4 足病変のケア<br>5 褥瘡管理<br>6 在宅 CAPD 管理<br>7 排尿ケア<br>1)間欠的自己導尿　2)膀胱留置カテーテル<br>8 ストーマ管理<br>9 在宅経管栄養法(HEN)<br>1)経鼻経管栄養法　2)胃瘻(PEG)<br>10 輸液管理<br>1)在宅中心静脈栄養法(HPN)　2)末梢静脈栄養法(PPN)<br>11 排痰ケア<br>12 気管カニューレ管理<br>13 在宅酸素療法(HOT)<br>14 在宅人工呼吸療法(HMV)<br>1)NPPV　2)TPPV | 講義<br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br>講義・演習<br>レベルⅠ<br>5.6 |
| 13・14 | 在宅療養を支える健康危機管理・災害対策 | 1 在宅療養における健康危機・災害対策<br>2 地域包括ケアシステムにおける健康危機・災害対策<br>3 訪問看護師による健康危機・災害対策<br>4 災害時における在宅療養者と家族の健康危機管理 | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 成人看護学概論 | 時期 | 1年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、産業看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | ライフサイクルにおける成人期の対象を身体的・心理的・社会的・文化的側面から包括的に理解するために、成人期の生活や健康に関する動向を学ぶ。また、複雑性や多様性を増す成人の健康問題に対応するための看護アプローチの基本的な考え方や理論、援助方法を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 成人期にある対象の特徴について理解する。<br>2 成人期にある対象の生活習慣やライフスタイルと健康問題との関連を理解する。<br>3 成人期にある対象の学習の特徴を理解し健康行動促進のための看護を理解する。<br>4 成人期にある対象の健康問題に有用な理論・概念を理解する。 | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 成人看護学[1] 成人看護学総論 医学書院<br>厚生の指標 国民衛生の動向 刊行版　厚生労働統計協会<br>生活習慣病のしおり | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～3 | 成人の特徴と生活 | 1 成人の特徴<br>1)成人という対象の理解<br>・発達段階、発達課題(エリクソン・ハヴィガースト)<br>・各発達段階の特徴(青年期・壮年期・中年期・向老期)<br>2 成人の生活<br>1)生活を営むこと 2)仕事をもち働くこと<br>3)家族からとらえる大人 4)人生をたどること | 講義 | 専任教員 |
| 4～7 | 成人の生活と健康 | 1 成人を取り巻く環境<br>1)人口 2)経済 3)成人の生活 4)日常生活の特徴<br>2 成人の健康の状況<br>1)生と死の動向 2)健康格差 3)受療状況 4)生活習慣病<br>3 生活と健康をまもりはぐくむシステム<br>1)健康増進法 2)健康日本 21 3)がん対策基本法<br>4)特定健康診査・特定保健指導 5)スマートライフプロジェクト | 講義 | 専任教員 |
| 8～11 | 成人への看護アプローチの基本 | 1 生活のなかで健康行動を生み、はぐくむ援助<br>1)大人の健康行動 2)行動変容ステージモデル・自己効力感<br>3)エンパワメント | 講義<br>演習:生活習慣病をもつ成人への健康指導 | 専任教員 |
| 12<br>13 | ヘルスプロモーションと看護 | 1 ヘルスプロモーションと看護<br>1)地域社会におけるヘルスプロモーションを促進する看護<br>2)職場におけるヘルスプロモーションを促進する看護<br>・職場における健康障害 ・労働基準法、労働安全衛生法<br>・労働者のための産業保健活動 ・職場における健康づくり活動 | 講義<br>講義 | 専任教員<br>産業看護師 |
| 14 | 健康をおびやかす要因と看護 | 1 健康バランスに影響を及ぼす要因<br>2 生活行動がもたらす健康問題とその予防<br>1)新たな健康問題(引きこもり、うつ病、ネット依存症など) | 講義 | 専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 成人看護学Ⅰ | 時期 | ２年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 完全に治ることは望めない、もしくは望みにくい慢性の経過をたどる対象に、再発防止や身体機能の維持・改善を目指し生活を支援する看護の基礎を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 慢性期にある成人期の対象とその家族の特徴、および看護を理解する<br>2 慢性期にある成人期の対象が病気とともにその人らしく生きていくことを支える看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 成人看護学[1]成人看護学総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[6]内分泌・代謝 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[8]腎・泌尿器 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[5]消化器 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅡ 簡易血糖測定(54) | | |
| 評 価 | 筆記試験・課題レポート・グループワーク参加・出席状況などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～2 | 慢性疾患の特徴 | 1 慢性病と慢性病を持つ人の特徴<br>2 慢性病との共存を支える看護の実践<br>1)セルフケア及びセルフマネジメントへの支援<br>2)生活の再構築への支援<br>①自己効力感　②教育的アプローチ | 講義 | 臨床看護師1 |
| 3～6 | 1型2型糖尿病患者の病期に応じた看護 | 1 血糖調節機能障害の原因と程度<br>2 症状と観察<br>1）血糖調節機能障害による症状の把握と援助<br>3 検査を受ける患者の看護<br>1）糖負荷試験＜OGTT＞2）自己血糖測定を行う患者の援助<br>4 治療を受ける患者の看護<br>1）インスリン補充療法　2）糖尿病治療内服薬による治療<br>3）食事・運動療法 | 講義・演習<br>レベルⅡ<br>54 | 臨床看護師2 |
| 7～10 | 慢性腎不全患者の病期に応じた看護 | 1 腎機能障害の原因と程度<br>2 症状と観察<br>1）尿毒症症状　2）不均衡症候群<br>3 透析治療を受ける患者の看護<br>1）血液透析　2）腹膜透析<br>4 腎移植を受ける患者の看護<br>5 セルフマネジメントのための教育的関わり<br>1）生活指導 | 講義・演習 | 臨床看護師3 |
| 11～14 | 肝硬変患者の病期に応じた看護 | 1 肝機能障害の原因と程度<br>2 肝機能障害による症状の把握と援助<br>1）肝性脳症　2）食道静脈瘤　3）浮腫・腹水<br>4）倦怠感　5）黄疸　6）出血傾向<br>3 治療を受ける患者の看護<br>1)薬物療法　2)生活指導　3)食道静脈瘤硬化療法<br>4 セルフマネジメントのための教育的関わり<br>1）生活指導 | 講義・演習 | 臨床看護師4 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 成人看護学Ⅱ | 時期 | ２年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 生命の危機状態(周手術期・救命救急)、急激な健康破綻に陥り侵襲的な治療を受ける対象及びその家族に対して、早期回復と QOL 向上にむけた看護を実践するための基礎を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 生命の危機状態にある対象とその家族の特徴と看護を理解する<br>2 周手術期にある対象の特徴と創傷治癒を促進するための援助方法を理解する<br>3 周手術期にある対象の事例をとおして健康上の問題及び看護の方向性を考える | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 成人看護学[1]成人看護学総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[3]循環器 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[5]消化器 医学書院<br>高齢者と成人の周手術期看護1 外来/病棟における術前看護　医歯薬出版<br>高齢者と成人の周手術期看護2 術中/術後の生体反応と急性期看護 医歯薬出版 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 急性期にある対象の特徴 | 1 健康の急激な破綻<br>2 急性期にある人の特徴<br>1)侵襲刺激に対する生体反応・心理的反応<br>3 急性期にある人の看護<br>1)危機理論　2)危機にある人々への支援 | 講義 | 専任教員 |
| 2～6 | 循環機能障害のある患者の看護 | 1 虚血性心疾患のある患者への看護<br>1)虚血性心疾患の原因と程度 2)経皮的冠動脈形成術<br>3) 冠動脈バイパス術　4)虚血性心疾患をもつ人の看護<br>2 心不全のある患者への看護<br>1)心不全の原因と程度　2)心不全の治療<br>3)心不全をもちながら生活する人の看護<br>3 不整脈のある患者への看護<br>1)不整脈の原因と程度　2)ペースメーカー植込み術<br>3)ペースメーカーを装着した患者への看護<br>4 弁膜症のある患者への看護<br>1)弁膜症の原因と程度　2)弁置換術を受ける患者の看護 | 講義<br>演習:12 誘導心電図 | 臨床看護師<br>1 |
| 7 | 周手術期看護 | 1 手術前の看護<br>1)身体面・心理面の準備<br>2)術後合併症を予防する為の術前看護 | 講義 | 専任教員 |
| 8<br>9<br>10<br>11 | | 2 手術中の看護　1)麻酔導入時の看護<br>2)手術体位による影響と援助 3)安全管理<br>3 術後の看護　1)手術侵襲と生体反応<br>2)手術後の疼痛管理　3)創傷、ドレーン管理<br>4 術後合併症と予防　1)呼吸器合併症　2)血栓塞栓症<br>3)術後イレウス　4)術後せん妄　5)術後出血<br>5 早期回復促進のための援助 | 講義 | 臨床看護師<br>2 |
| 12～14 | 周手術期の事例展開 | 1 胃がんの症状と看護<br>2 事例展開「幽門側胃切除術を受ける患者」 | 演習 | 専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 成人看護学Ⅲ | 時期 | ２年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 死に直面した対象及びその家族に対し、個人の持つ価値観や人生観を理解し、死にゆく人の尊厳を守り、苦痛や苦悩をできる限り緩和し、その人らしくよりよく生きられるような看護を実践する基礎を学ぶ。 | | |
| 目 標 | １ 終末期にある成人期の対象とその家族の特徴および看護を理解する<br>２ 終末期にある対象の事例を通して、終末期看護について考える | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 成人看護学[1]成人看護学総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[4]血液・造血器 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 成人看護学[2]呼吸器 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験・出席・課題レポート・看護過程・グループワークなど総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～2 | 人生の最期のときを支える看護 | 1 延命医療から患者の自己決定を重視した医療へ<br>2 人生の最期のときにおける緩和ケア<br>3 人間にとっての死<br>4 全人的苦痛(トータルペイン)<br>5 人生の最期のときを支える看護 | 講義 | 臨床看護師1 |
| 3～6 | 血液・造血器疾患の患者の看護 | 1 疾患をもつ患者の経過と看護(急性期・慢性期・再発期・患者の経過)<br>2 主要症状を有する患者の看護(貧血・易感染・出血傾向)<br>3 検査を受ける患者の看護(末梢血採血・骨髄穿刺・骨髄生検)<br>4 治療を受ける患者の看護(がん薬物療法・腫瘍免疫療法・放射線療法・造血幹細胞移植・輸血療法)<br>5 疾患をもつ患者の看護<br>1)造血器腫瘍患者に共通する看護<br>2)急性骨髄性白血病患者の看護<br>3)急性リンパ性白血病患者の看護<br>4)慢性骨髄性白血病患者の看護<br>5)悪性リンパ種患者の看護<br>6)多発性骨髄腫患者の看護<br>7)免疫性血小板減少症患者の看護<br>8)血友病患者の看護 | 講義 | 臨床看護師2 |
| 7～14 | 肺がん患者の病期に応じた看護<br>(看護過程) | 1 肺がん患者の経過と看護<br>1)症状に対する看護<br>2)検査を受ける患者の看護<br>3)手術を受ける患者の看護<br>4)肺がん患者の看護<br>2 事例展開 ：「肺がんターミナル期にある患者の看護事例」 | 講義・演習 | 専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 成人看護学Ⅳ | 時期 | 2年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | 2単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | 様々な健康レベルにある成人期の対象を看護するために必要な援助技術を学ぶ。<br>対象者が主体的な療養行動を新たに獲得し、その人らしい生活を再建するための支援に必要な看護を学ぶ。<br>また、対象者が最期までその人らしく尊厳をもって生きることを支えるための看護について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 心身の状況に応じた援助技術を修得する<br>2 様々な状況にある対象者が主体的な療養行動を獲得するために必要な看護技術を修得する<br>3 緩和ケアに必要な基本的看護技術を修得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1.豊かな人間力　☑ 2.看護を実践する力　☑ 3.探求する力　☑ 4.連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 成人看護学[1] 成人看護学総論 医学書院<br>写真でわかる臨床看護技術2 インターメディカ<br>高齢者と成人の周手術期看護1 外来/病棟における術前看護 第３版 医歯薬出版<br>高齢者と成人の周手術期看護2 術中/術後の生体反応と急性期看護 第３版 医歯薬出版 | | |
| 技術経験録(No)<br>演習項目 | レベルⅠ 精神的安寧を保つためのケア(71)<br>レベルⅡ 食事指導(4)、ストーマ管理(12)、ドレーン類挿入部位の処置(37) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～9 | 手術を受ける対象の看護技術 | 1 術前の看護<br>1)呼吸訓練　2)深部静脈血栓予防<br>2 術後の看護<br>「成人看護学Ⅱ」の看護過程で計画した看護の実践<br>1)帰室直後の観察と根拠<br>2)離床時の看護<br>3)創傷処置<br>①滅菌操作<br>②ドレーンガーゼの交換<br>4)パンフレットによる退院指導<br>3 ストーマケア<br>1)ストーマの分類<br>2)ストーマ管理の実際 | 講義・演習<br>講義・演習<br>演習<br>レベルⅡ37<br>レベルⅡ4<br>講義・演習<br>レベルⅡ12 |
| 10～11 | セルフマネジメントが必要な対象の看護技術 | 1 セルフケア・セルフマネジメントを促す看護<br>・事例をもとにセルフケア・セルフマネジメントを促す援助 | 講義 |
| 11・12 | 人生最期のときを支える看護技術 | 1 援助者の態度<br>2 人生最後のときを支える看護師の役割と機能<br>・身体的苦痛を緩和するための知識と技術、態度 | |
| 13・14 | | 1 緩和ケアに必要な基本的看護技術の実践<br>・精神的安寧を保つためのケア<br>2 死後の処置 | 講義・演習<br>レベルⅠ71<br>演習 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 老年看護学概論 | 時期 | 1年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | ライフサイクルにおける老年期の特徴と高齢化に伴う保健・医療・福祉システム変遷を理解し、老年看護の基本となる考えを学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 加齢変化を捉え、老年看護の対象と役割について理解する<br>2 超高齢社会における保健・医療・福祉の動向と課題を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　老年看護・病態・疾患論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　老年看護学 医学書院<br>生活機能からみた老年看護過程＋病態・生活機能関連図 山田律子 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート、授業態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～2 | 老年看護学の理論と概念 | 1 加齢と老化<br>1)生理的老化と病的老化<br>2 加齢に伴う身体的・心理的・社会的側面の変化<br>3 老年看護における生活史<br>4 高齢者の定義<br>5 老年期の発達課題と老年看護に活用できる理論<br>6 老年看護学の変遷 | 講義 |
| 3～8 | 高齢者の特徴 | 1 加齢に伴う身体的変化<br>1)各感覚器・臓器・運動器の加齢変化<br>2)サルコペニア・ロコモティブシンドローム<br>3)フレイル　4)老年症候群<br>2 加齢に伴う心理的・社会的変化 | 講義 |
| | | 3 高齢者疑似体験 | 演習 |
| 9・10 | 我が国の高齢化問題 | 1 超高齢社会の現況<br>2 高齢者に関する統計とその背景<br>1)世帯数　2)有訴率　3)受療率<br>4)死因　5)事故　6)就業と所得状況 | 講義 |
| 11～12 | 高齢社会における保健医療福祉の動向 | 1 高齢者にかかわる保健医療福祉の法律と制度<br>1)保健医療福祉制度の変遷<br>2)高齢者医療制度の変遷<br>3)介護保険制度とサービス<br>2 地域共生社会と看護活動 | 講義 |
| 13・14 | 高齢者の権利擁護 | 1 高齢者に対する差別と権利擁護<br>1)スティグマ　2)エイジズム　3)ノーマライゼーション<br>2 高齢者虐待の実態と法律<br>1)高齢者虐待防止法　2)身体拘束<br>3 権利擁護のための制度<br>1)成年後見制度　2)日常生活自立支援事業 | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 老年看護学Ⅰ | 時期 | 1年次　前期･後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 高齢者特有の症候と健康問題を理解し、生活者としての視点を踏まえ、生活機能を維持･向上するための看護を学ぶ。治療を必要とする高齢者の看護と人生の最終章を生きる老年期のエンドオブライフケアについて学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 老年期特有の症候による生活機能への影響を考え、高齢者の生活を支える看護について理解する<br>2 治療を必要とする高齢者の看護について理解する<br>3 高齢者のエンドオブライフケアについて理解する | | |
| ディプロマ･ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携･協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　老年看護･病態･疾患論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　老年看護学　医学書院<br>生活機能からみた老年看護過程＋病態･生活機能関連図 山田律子 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート、授業態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～3<br><br><br><br><br><br>4～8 | 高齢者の生活を支える看護 | 1 高齢者のヘルスアセスメント<br>2 高齢者のフィジカルアセスメント<br>3 高齢者の生活機能と評価<br>1)ICF 2)CGA(IADL、FIM 等)<br>3)障害高齢者の日常生活自立度判定基準<br>4 生活行動と目標志向型思考<br>5 高齢者に特有な症候と看護<br>1)フレイルと廃用症候群　2)骨粗鬆症と骨折<br>3)摂食･嚥下障害と低栄養　4)尿失禁･前立腺肥大症<br>5)便失禁･便秘･下痢　6)脱水　7)掻痒　8)褥瘡･スキンテア<br>9)睡眠障害　10)白内障と聴覚障害　11)うつ病　12)せん妄 | 講義･演習 |
| 9～11 | 治療を必要とする高齢者の看護 | 1 薬物療法を受ける高齢者の看護<br>1)加齢に伴う薬物動態の変化<br>2)高齢者特有の薬物有害事象<br>3)服薬アドヒアランスと服薬管理支援<br>2 手術を受ける高齢者の看護<br>1)高齢者ゆえのリスクと QOL を考えた適応<br>2)術後合併症と予防ケア<br>3 リハビリテーションを受ける高齢者の看護<br>1)高齢者のリハビリテーションの目的と特徴<br>2)包括的リハビリテーション　3)経過別リハビリテーション<br>4 入院治療を必要とする高齢者の看護<br>1)入院に伴う環境の変化と影響　2)入退院支援･意思決定支援 | 講義 |
| 12～14<br><br><br><br><br><br>15 | 高齢者のエンドオブライフケア<br><br><br><br><br><br>終了試験 | 1 日本人の死生観<br>2 高齢者の意思決定支援<br>1)アドバンスケアプランニング<br>3 苦痛を緩和するケア<br>4 エンドオブライフケアの場<br>1)自宅　2)施設 | 講義･演習 |

| 科目名 | 老年看護学Ⅱ | 時期 | 2年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 老年期に多い疾患の看護を理解し、健康逸脱から回復を促す看護について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 認知症をもつ高齢者の看護を理解する<br>2 脳血管障害・神経系疾患をもつ高齢者の看護を理解する<br>3 運動器障害をもつ高齢者の看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　老年看護・病態・疾患論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　老年看護学 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　成人看護学[7] 脳・神経 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　成人看護学[10] 運動器 医学書院<br>生活機能からみた老年看護過程＋病態・生活機能関連図 山田律子 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～4 | 認知症をもつ高齢者の理解と看護 | 1 認知症の定義<br>2 認知症の症状<br>1)生理的物忘れと認知症の違い<br>2)中核症状と行動・心理症状(BPSD)<br>3 認知機能と生活機能の評価<br>1)MMSE・HDS-R<br>2)認知症高齢者の日常生活自立度判定基準<br>4 四大認知症の看護 | 講義・演習 | 臨床看護師１ |
| 5～9 | 脳血管障害をもつ高齢者の理解と看護 | 1 脳卒中に対する急性期から回復期の看護<br>1)発症要因<br>2)症状と看護<br>・意識レベルの評価　・頭蓋内圧亢進症状　・高次脳機能障害<br>・運動・感覚機能障害と麻痺の評価　・嚥下障害　・排泄障害<br>3)薬物療法・手術療法・リハビリテーションを受ける患者の看護 | 講義 | 臨床看護師２ |
| | パーキンソン病をもつ高齢者の理解と看護 | 1 パーキンソン病の看護<br>1)ホーエン・ヤール重症度分類と症状に合わせた看護 | 講義 | |
| 10～14 | 運動器障害をもつ高齢者の理解と看護 | 1 運動器疾患に対する急性期から回復期の看護<br>1)腰部脊柱管狭窄症の看護<br>2)圧迫骨折の看護<br>・コルセットの目的と装着中の留意点<br>3)変形性膝関節症に対する人工膝関節置換術後の看護<br>・CPM の目的と実施中の留意点<br>4)変形性股関節症に対する人工股関節置換術後の看護<br>5)大腿転子部骨折・大腿骨頸部骨折の手術前後の看護 | 講義・演習 | 臨床看護師３ |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 老年看護学Ⅲ | 時期 | ２年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(15 時間) ８回 |
| 科目の概要 | 高齢者の特徴と老年特有の健康障害を踏まえ、生活機能とストレングスに着目した看護過程の展開方法を学ぶ。<br>高齢者の QOL とその人らしい生活のあり方を考え、対象とその家族の支援について考える能力を養う。 | | |
| 目 標 | １高齢者の特徴と老年特有の健康障害を踏まえ、生活機能とストレングスに着目した看護過程の展開方法を理解する<br>２高齢者の QOL を考え、対象とその家族の支援について理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　老年看護・病態・疾患論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野　老年看護学　医学書院<br>生活機能からみた老年看護過程＋病態・生活機能関連図 山田律子 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 課題レポート、グループワーク・演習への参加意欲・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1 | 健康障害のある高齢者の看護過程の展開 | 事例：大腿骨頸部骨折を受傷し人工骨頭置換術を施行した認知症高齢者の看護<br>1 老年看護における看護過程の展開<br>1)生活機能と生活行動モデル<br>2)目標志向型思考 | 講義 |
| 2・3 | | 2 高齢者の特徴を踏まえたアセスメント<br>1)生活行動モデルを用いて情報収集及び情報を整理する<br>2)得られた情報を基礎知識を活用しながら分析する | 講義・演習 |
| 4・5 | | 3 全体像の把握<br>1)病態・生活機能関連図<br>・病態と望む生活に近づくためのもてる力、生活に及ぼす影響<br>・予測される危険性<br>4 看護の焦点の明確化<br>1)看護の焦点<br>・対象と家族が望む生活や状態像<br>・6 つの生活行動<br>2)優先順位の決め方<br>・対象者の生活に及ぼす影響の大きさ | 講義・演習 |
| 6 | | 5 看護計画<br>1)長期的な看護の視点<br>2)対象のもてる力・残存機能を活用した援助の視点<br>3)根拠に基づく具体策 | 講義・演習 |
| 7・8 | 健康障害のある高齢者への看護実践 | 6 看護計画の実施<br>1)対象の目指す回復像と QOL の維持・向上を考えた援助<br>2)もてる力や潜在している力を引き出す援助<br>7 看護過程の評価<br>1)目標志向型思考における評価<br>・望まれる状態像が維持・達成できているかどうか | 講義・演習 |

| 科目名 | 小児看護学概論 | 時期 | 1年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 小児各期における子どもの成長・発達の特徴を理解し、子どもの最善の利益のために、子どもと家族の特徴と社会の変化を踏まえた小児看護の役割について学ぶ | | |
| 目 標 | 1 小児看護の対象となる子どもの特徴と、看護の機能と役割を理解する<br>2 小児各期の特徴に適した基本的生活習慣と養護を理解する<br>3 子どもを取り巻く社会環境と動向、子どもの健康上の課題を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 小児看護学[1] 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 小児看護学[2] 小児看護学各論 医学書院<br>国民衛生の動向 一般財団法人 厚生労働統計協会<br>写真でわかる小児看護技術アドバンス インターメディカ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1･2 | 小児看護学の特徴と理念 | 1 小児看護学の目指すところ　2 小児と家族の諸統計<br>3 小児看護の変遷　4 小児看護における倫理<br>5 小児看護の課題 | 講義 |
| 3 | 子どもの成長・発達 | 1 成長・発達とは<br>1）一般的原則　2）成長・発達に影響する因子<br>3）成長・発達の評価 | 講義 |
| 4 | 小児各期の成長・発達の特徴 | 新生児 | 講義 |
| 5 | | 乳児期 | 講義 |
| 6 | | 幼児期 | 講義 |
| 7 | | 学童期・思春期・青年期 | 講義 |
| 8･9 | 子どもの栄養 | 1 子どもにとっての栄養の意義　2 子どもと食育<br>3 発達段階別の子どもの栄養の特徴<br>1)乳児期　2)幼児期　3)学童期・思春期　4)思春期・青年期 | 講義・演習：人工乳作成・離乳食体験 |
| 10 | 子どもの養育と看護 | 1 乳幼児期の看護と生活指導<br>2 学童・思春期・青年期の看護と生活指導<br>3 子どもの遊びと発達　4 事故防止 | 講義 |
| 11～13 | 家族の特徴とアセスメント<br>子どもを取り巻く社会 | 1 子どもにとっての家族とは<br>1 児童福祉　2 医療費の支援　3 予防接種　4 学校保健<br>5 特別支援教育　6 臓器移植 | 講義 |
| 14 | 子どもの虐待と看護 | 1 子どもの虐待への対策の経緯と現状<br>2 子どもの虐待とは<br>3 リスク要因と発生予防・早期発見<br>4 子どもの虐待に特徴的にみられる状況<br>5 求められるケア | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 小児看護学Ⅰ | 時期 | 2年次 前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | 医療が提供される場面であっても、常に子どもの成長・発達を踏まえて看護が展開されることを理解し、治療及び検査・処置における子どもと家族に対する看護を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 病気や入院が子どもと家族に与える影響と看護を理解する<br>2 健康障害をもつ子どもに必要な治療環境及び検査・処置における援助を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1.豊かな人間力 ☑ 2.看護を実践する力 ☑ 3.探求する力 ☑ 4.連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 小児看護学[1] 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 小児看護学[2] 小児看護学各論 医学書院<br>写真でわかる小児看護技術アドバンス インターメディカ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 酸素吸入の実施(30)、ネブライザーを用いた気道内加湿(31)、バイタルサインの測定(50)、検体(尿、血液)の取り扱い(53)、安全な療養環境の整備(転倒・転落・外傷予防)(65)<br>レベルⅡ 点滴静脈注射の管理(44) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1 | 病気・障害を持つ子どもと家族の看護 | 1 病気・障害が子どもと家族に与える影響<br>2 子どもの健康問題と看護 | 講義 |
| 2 | 子どもの状況(環境)に特徴づけられる看護 | 1 入院中の子どもと家族の看護<br>2 外来における子どもと家族の看護<br>3 在宅療養中の子どもと家族の看護<br>4 災害時の子どもと家族の看護 | 講義 |
| 3・4 | 子どもにおける疾病の経過と看護 | 1 慢性期にある子どもと家族の看護<br>2 急性期にある子どもと家族の看護<br>3 周手術期の子どもと家族の看護<br>4 終末期の子どもと家族の看護 | 講義 |
| 5・6 | 子どものアセスメント | 1 アセスメントに必要な技術<br>1)コミュニケーション<br>2)バイタルサイン<br>3)身体計測 | 講義 |
| 7～9 | 検査・処置を受ける子どもの看護 | 1 子どもにとっての検査・処置体験<br>2 検査・処置各論<br>与薬・輸液管理・採血・採尿・腰椎穿刺・酸素療法・吸入 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>30.31.50.53<br>65<br>レベルⅡ<br>44 |
| 10・11 | 症状を示す子どもの看護 | 1 子どもの主な症状の観察と看護<br>不機嫌・啼泣・痛み・呼吸困難・けいれん発熱・嘔吐 | 講義 |
| 12～14 | 子どもの遊び | 1 子どもにとって遊びとは<br>2 発達段階に合わせた遊び | 演習:<br>発達に合わせた遊びの提供 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 小児看護学Ⅱ | 時期 | 2年次 前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間) 回数 | １単位(30時間) 15回 |
| 科目の概要 | 疾患や障害をもちながらも成長・発達段階にある子どもとその家族を理解し、疾患と症状、治療に伴う看護を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 健康障害をもつ子どもとその親・家族への看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 小児看護学[1] 小児看護学概論・小児臨床看護総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 小児看護学[2] 小児臨床看護各論 医学書院 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1・2 | 低出生体重児の看護 | 1 胎外生活への適応を支える看護<br>2 成長・発達を支える看護<br>3 家族への看護 | 講義 | 臨床看護師1 |
| 3 | 急性胃腸炎の子どもの看護 | 1 脱水の評価と看護<br>2 輸液と栄養補給<br>3 清潔ケア・感染予防 | 講義 | 専任教員 |
| 4・5 | ネフローゼ症候群の子どもの看護 | 1 急性期(欠乏期)<br>2 回復期(利尿期)<br>3 症状消失後<br>4 退院に向けて | 講義 | 臨床看護師2 |
| 6 | 食物アレルギーの子どもの看護 | 1 アレルギー症状に対する看護<br>2 予防と日常生活における注意点(誤食防止) | 講義 | 臨床看護師2 |
| 7～9 | 気管支喘息の子どもの看護 | 1 急性発作に対する看護<br>2 長期的管理に置ける看護<br>1)自己管理の促進(喘息症状のコントロール)<br>2)アドヒアランス向上への支援 | 講義 | 臨床看護師2 |
| 10・11 | 川崎病の子どもの看護 | 1 急性期の看護<br>2 回復期の看護<br>3 家族への看護 | 講義 | 臨床看護師2 |
| 12・13 | 白血病の子どもの看護 | 1 診断時の看護<br>2 治療を受ける看護<br>3 再燃・再発時の看護 | 講義 | 専任教員 |
| 14 | 障害のある子どもと家族の看護 | 1 障害の捉え方<br>2 障害のある子どもと家族の特徴<br>3 障害のある子どもと家族への社会的支援 | 講義 | 臨床看護師3 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 小児看護学Ⅲ | 時期 | 2年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | 1単位(15時間) 8回 |
| 科目の概要 | 子どもの特徴を踏まえた看護過程の展開と、治療に伴う子ども特有の看護技術を修得する。 | | |
| 目 標 | 1 子どもの治療に伴う看護の知識と技術を理解する<br>2 子どもの特徴を踏まえた看護過程のプロセスを理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 小児看護学[1] 小児看護学概論・小児臨床看護総論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 小児看護学[2] 小児臨床看護各論 医学書院<br>写真でわかる小児看護技術アドバンス インターメディカ | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 課題レポート、グループワーク・演習への参加意欲・ 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～3 | 検査・処置を受ける子どもの看護 | 1 子どもにとっての検査・処置における看護<br>2 発達段階・疾患・症状・治療・検査に応じた看護 | 演習：プレパレーション |
| 4～8 | 川崎病の子どもの看護 | 川崎病の診断を受けた幼児期の子どもの事例展開<br>1 アセスメント<br>1)ゴードンの機能的健康パターンを用いて、疾患、症状、検査、治療、幼児期の発達段階における特徴、生活、家族、きょうだいへのケアの視点から情報収集及び情報整理をする<br>2)得られた情報を基礎知識を活用しながら分析(現状・原因・成り行き)をする<br><br>2 全体像の把握<br><br>3 看護問題の明確化<br>1)看護問題の種類<br>・実在型とリスク型<br>2)優先順位の決め方<br>・アセスメントの結果から導かれた対象の「望ましい姿」<br>・生命を脅かすような問題の有無<br><br>4 看護計画<br>1)期待される成果の明確化・・・看護目標の設定<br>2)介入方法の検討・・・看護計画の内容(個別性への配慮) | 演習：看護過程 |

| 科目名 | 母性看護学概論 | 時期 | ２年次 前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、<br>助産師または保健師 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 母性に関連する保健の動向、対象を取り巻く現状および課題を学び母性看護について理解する。<br>女性のライフサイクル各期の特徴・健康問題を学び看護を理解する。 | | |
| 目 標 | １母性の概念と母性看護の意義および特性について理解する<br>２母性に関する諸問題、各期における母性の特徴を理解し、母性の健康保持・増進に必要な看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 母性看護学［1］母性看護学概論 医学書院<br>国民衛生の動向 一般財団法人 厚生労働統計協会 | | |
| 技術経験録演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～3 | 母性看護の基盤概念 | 1 母性とは<br>2 母子関係と家族の発達 ・機能<br>3 セクシュアリティ<br>4 ヘルスプロモーション | 講義・演習 | 専任教員 |
| 4～6 | 社会の変遷、現状と看護 | 1 歴史的変遷と現状<br>2 母子保健統計<br>3 関係法規・施策<br>4 母性看護提供システム<br>5 災害時の妊産婦と家族支援 | | |
| 7 | 性と生殖機能のメカニズム | 1 受胎<br>2 ヒトの発生・性的分化 | | |
| 8・9 | 母性看護の倫理と安全 | 1 生命倫理と看護倫理<br>2 母性看護における安全・事故予防 | | |
| 10～12 | ライフサイクル各期の看護 | 1 思春期の健康と看護<br>2 成熟期の健康と看護<br>3 更年期・老年期の健康と看護 | | |
| 13・14 | リプロダクティブ・ヘルスケア | 1 リプロダクティブ・ヘルス／ライツ<br>2 家族計画<br>3 性感染症とその予防<br>4 人工妊娠中絶と看護<br>5 性暴力と虐待<br>6 国際化社会と看護 | | 専任教員<br>保健師<br>助産師<br>専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | |

| 科目名 | 母性看護学Ⅰ | 時期 | 2年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 正常な妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある母子と家族に対して必要な看護を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1　妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の正常経過と対象について理解する<br>2　妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象と家族への看護を学ぶ | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 母性看護学[2] 母性看護学各論　医学書院<br>写真でわかる母性看護技術アドバンス 平澤美恵子・村上睦子 インターメディカ<br>看護実践のための根拠がわかる母性看護技術　メヂカルフレンド社 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～4 | 正常な妊娠経過と看護 | 1 妊娠経過と胎児の発育<br>2 妊娠期の身体的変化、マイナートラブル<br>3 妊婦と家族の心理・社会的変化<br>4 妊婦の健康生活<br>5 妊婦と胎児のアセスメント<br>6 健康の維持・増進への支援、セルフケア教育 | 講義・演習 |
| 5～7 | 正常な分娩経過と看護 | 1 分娩経過と胎児の健康状態<br>2 産婦の心理・社会的変化<br>3 産婦と胎児のアセスメント<br>4 分娩各期の産婦の基本的ニーズと看護<br>5 妊婦疑似体験 | |
| 8～10 | 正常な産褥経過と看護 | 1 産褥期の身体的変化<br>1）退行性変化<br>2）進行性変化<br>2 褥婦と家族の心理的・社会的変化<br>3 褥婦のアセスメント<br>4 身体機能の回復への支援<br>5 褥婦の日常生活とセルフケア | |
| 11～13 | 新生児の生理と看護 | 1 新生児の生理と身体機能<br>2 新生児のアセスメント<br>3 出生直後の看護<br>4 新生児期の看護 | |
| 14 | 育児にかかわる看護 | 1 育児技術、母乳育児への支援<br>2 親子の愛着形成および家族関係再構築の支援 | |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 母性看護学Ⅱ | 時期 | ２年次 後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 医師 臨床助産師 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期に異常を伴う母子、家族に対して必要な看護を学ぶ。<br>母性看護に関連した看護技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の異常と看護について理解する<br>2 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の対象に必要な看護技術を習得する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 母性看護学[2] 母性看護学各論 医学書院<br>写真でわかる母性看護技術アドバンス 平澤美恵子・村上睦子 インターメディカ<br>看護実践のための根拠がわかる母性看護技術 メヂカルフレンド社 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | レベルⅠ 新生児の沐浴・清拭(28) | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～3 | 妊娠の異常と看護 | 1 高年・若年妊婦 2 多胎<br>3 妊娠悪阻 4 妊娠貧血<br>5 不育症、切迫流・早産 6 感染症<br>7 妊娠高血圧症候群 8 妊娠糖尿病<br>9 前置胎盤 10 常位胎盤早期剥離 | 講義・演習 | 臨床助産師1 |
| 4・5 | 分娩の異常と看護 | 1 前期破水 2 微弱陣痛・過強陣痛<br>3 胎児機能不全 4 分娩時異常出血<br>5 帝王切開術 | 講義・演習 | 臨床助産師1 |
| 6～8 | 産褥の異常と看護 | 1 子宮復古不全 2 産褥熱<br>3 乳房トラブル 4 精神障害<br>5 帝王切開術後<br>6 死産、障害をもつ新生児を出産した褥婦の看護 | 講義・演習 | 臨床助産師2 |
| 9 | 新生児の異常と看護 | 1 早産児 2 分娩外傷<br>3 高ビリルビン血症 4 新生児ビタミンＫ欠乏症 | 講義・演習 | 臨床助産師2 |
| 10 | | 5 新生児仮死 6 新生児蘇生法(NCPR) | 講義 | 医師 |
| 11～14 | 母性看護に関連した技術 | 1 妊婦 腹囲・子宮底測定<br>レオポルド触診法<br>胎児心音聴取<br>分娩監視装置モニター<br>2 産婦 産痛緩和<br>3 褥婦 子宮復古の観察<br>産褥体操<br>ポジショニング・ラッチオン<br>4 新生児 全身の観察<br>清拭・沐浴<br>オムツ交換 授乳 | 講義・演習<br>レベルⅠ<br>28<br>演習:<br>妊婦計測<br>褥婦観察<br>新生児観察 | 専任教員<br><br>専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | |

| 科目名 | 母性看護学Ⅲ | 時期 | ２年次 後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(15 時間) ８ 回 |
| 科目の概要 | 妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象とその家族を理解し、看護過程を展開する。 | | |
| 目 標 | 1 母性看護の特徴を踏まえた看護過程を理解する<br>2 対象となる妊婦・産婦・褥婦・新生児とその家族を関連させた看護過程を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力 ☑ 2. 看護を実践する力 ☑ 3. 探求する力 ☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 母性看護学[1] 母性看護学概論 医学書院<br>系統看護学講座 専門分野 母性看護学[2] 母性看護学各論 医学書院<br>看護実践のための根拠がわかる母性看護技術 メヂカルフレンド社 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 課題レポート 出席状況・態度などから総合的に評価する | | |

授 業 計 画

| 回数 | 項 目 | 内 容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1 | 母性看護学における看護過程 | 母性看護学における看護過程の特徴<br>全体論的な対象の把握、家族・適応過程<br>健康の保持・増進への看護<br>ウエルネス視点での看護診断について | 講義 |
| 2 | 妊娠期にある対象の看護過程 | 妊娠中期 妊婦の看護過程<br>事例:高齢産労妊婦の看護 | 講義 |
| 3 | 分娩期にある対象の看護過程 | 分娩第1期 産婦の看護過程<br>事例:早期破水がみられた産婦の看護 | 講義 |
| 4・5 | 産褥期・新生児期にある対象の看護過程 | 褥婦の看護過程<br>事例:経腟分娩をした初産婦とその新生児の看護<br>1 アセスメント<br>1)情報の整理<br>妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期、家族関係、<br>女性・家族のライフステージの発達課題<br>2)分析・解釈<br>基礎知識を活用し、母児一体の視点で情報を分析 | 講義・演習 |
| 6 | | 2 看護問題の明確化(看護診断)<br>1)看護診断の種類<br>・ウエルネス<br>・看護問題(実在型・リスク型)<br>2)優先順位 | |
| 7 | | 3 看護計画<br>1)期待される成果の明確化(看護目標の設定)<br>2)個別性、具体性、セルフケアを考慮した内容 | |
| 8 | | 4 看護計画の評価の視点<br>1)看護実践の適切・妥当性<br>2)目標の達成度、要因<br>3)看護問題の再明確化、看護目標、看護計画の修正 | 講義 |

| 科目名 | 精神看護学概論 | 時期 | １年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間)、15 回 |
| 科目の概要 | 精神の健康の概念を理解し、精神の健康保持・増進のための看護について学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1　精神の健康の概念と精神看護の基本的な考え方について理解する<br>2　人間の心のはたらきと人格の発達について理解する<br>3　現代社会における精神保健問題について理解し、精神の健康保持・増進のための看護について考える<br>4　精神保健医療福祉の変遷と法制度について理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　精神看護の基礎 精神看護学①, 医学書院.<br>系統看護学講座 専門分野　精神看護の展開 精神看護学②, 医学書院.<br>系統看護学講座 別巻 精神保健福祉<br>厚生の指標 増刊 国民衛星の動向 厚生労働統計協会 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、授業出席状況および態度、課題レポートなど総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～3 | 精神の健康の概念と精神保健の考え方 | 1 精神の健康の概念と定義<br>2 ストレス反応とその対処(コーピング)<br>1)ストレス反応の3つの相<br>2)危機(クライシス)の概念と予防・介入<br>3 トラウマ(心的外傷)と回復<br>4 精神障害のとらえ方<br>1)ICF(国際生活機能分類)の考え方<br>2)精神保健における3つの予防概念 | 講義 |
| 4～6 | 心のはたらきと人格の形成 | 1 心のはたらき<br>1)意識と認知機能　2)感情<br>3)学習と行動　4)知能<br>2 心のしくみと人格の発達<br>1)人格と気質　2)精神力動理論と防衛機制<br>3)対象関係論 | 講義 |
| 7～11 | 現代社会における精神保健問題 | 1 心のケアが必要となった背景(災害と心のケア)<br>2 現代社会における精神保健問題<br>1)家族と精神の健康(DV・虐待・依存症)<br>2)学校における精神の健康(いじめ・引きこもり)<br>3)職場における精神の健康(ハラスメント・自殺)<br>4)地域における精神の健康 | 講義・演習 |
| 12～14 | 精神保健医療福祉の変遷と法制度 | 1 精神障害と治療の歴史<br>2 精神障害と法制度<br>1)医療を受けるための法制度<br>2)生活を支えるための法制度<br>3 精神障害者の権利擁護<br>1)偏見・差別(スティグマ)<br>2)権利擁護(アドボカシー)に関する法律と制度 | 講義 |
| 15 | 終了試験 | | |

| 科目名 | 精神看護学Ⅰ | 時期 | 2年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員・臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30 時間)、15 回 |
| 科目の概要 | 精神疾患と治療に伴う援助を理解し、対象の回復を促進する看護について学ぶ。 | | |
| 目 標 | １主な精神科疾患の特徴(診断・症状・治療)と看護を理解する<br>2精神障害をもつ対象の回復を支援するための看護を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　精神看護の基礎 精神看護学①, 医学書院.<br>系統看護学講座 専門分野　精神看護の展開 精神看護学②, 医学書院. | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、授業出席状況および態度、課題レポートなど総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～2 | 精神科疾患の<br>あらわれ方 | 1 精神を病むということ<br>2 精神症状と状態像<br>1)思考・感情・意欲・知覚・記憶の障害 | 講義 | 専任教員 |
| 3～7 | | 3 主な精神科疾患の特徴と看護<br>1)統合失調症<br>2)気分(感情)障害(躁極症および関連症群、抑うつ症群)<br>3)神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害<br>4)精神作用物質使用による精神および行動の障害<br>5)知的能力障害<br>6)発達障害 | 講義・演習 | 専任教員 |
| 8～10 | 精神科における<br>主な治療とその看護 | 1 精神療法<br>1)個人療法　　2)集団精神療法<br>3)家族療法<br>2 薬物療法<br>1)向精神薬とその種類<br>2)様々な有害反応と看護<br>3 電気けいれん療法<br>4 環境・社会療法 | 講義 | 臨床看護師 |
| 11～14 | 回復に必要な概念と<br>看護 | 1 回復とは<br>1)回復の意味<br>（リカバリー・ストレングス・レジリエンス）<br>2 回復を支えるプログラム<br>1)ソーシャルスキルトレーニング(SST)<br>2)認知行動療法(CBT)<br>3 入院治療の目的と意味<br>1)入院形態<br>2)入院のメリット・デメリット<br>4 退院に向けての支援<br>1)長期入院患者の支援<br>2)生活を支える社会資源・サービス<br>3)多職種連携による支援の実際 | 講義 | 臨床看護師 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 精神看護学Ⅱ | 時期 | ２年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員・臨床看護師 | 単位(時間)、回数 | １単位(30時間)、15回 |
| 科目の概要 | 精神障害をもつ対象へのかかわり方の基本と主な精神症状と生活への看護について学修する。 | | |
| 目 標 | 1精神障害をもつ対象との援助関係構築のための関わり方を理解する<br>2精神障害をもつ対象の安全を守るための看護を理解する<br>3精神科における身体のケアの実際を理解する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　精神看護の基礎 精神看護学①, 医学書院.<br>系統看護学講座 専門分野　精神看護の展開 精神看護学②, 医学書院. | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、授業出席状況および態度、課題レポートなど総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1～4 | ケアの人間関係 | 1 ケアの原則<br>2 ケアの方法<br>1)そばにいること<br>2)遊ぶこととユーモア<br>3)話すこと、聞くこと | 講義・演習<br>ロールプレイ | 専任教員 |
| 5～7 | | 3 関係をアセスメントする<br>1)プロセスレコードの活用 | 講義・演習 | 専任教員 |
| 8～10 | 安全を守るための看護 | 1 安全の条件をとリスクマネジメント<br>1)行動制限<br>2)隔離<br>3)身体拘束<br>2 緊急事態への対応<br>1)自殺<br>2)暴力<br>3)無断離院 | 講義 | 臨床看護師 |
| 11～14 | 精神科における身体のケアの実際 | 1 精神療法としての身体のケア<br>2 急性期・回復期・慢性期における身体のケア<br>3 日常生活における身体のケア<br>1)食事に関するケア<br>2)排泄に関するケア<br>3)清潔に関するケア<br>4)活動と休息に関するケア<br>5)睡眠に関するケア<br>4 身体合併症をもつ対象の身体のケア<br>1)メタボリックシンドローム(肥満・糖尿病)<br>2)やせ(るい痩)<br>3)肺炎<br>4)骨折<br>5)窒息<br>6)悪性新生物 | 講義 | 臨床看護師 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 精神看護学Ⅲ | 時期 | ２年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、回数 | １単位(15 時間)、８回 |
| 科目の概要 | 精神に障害のある対象を理解し、看護過程を用いて健康上の課題解決にむけた看護について学修する。 | | |
| 目 標 | 看護過程を用いて精神障害をもつ対象の健康上の問題および看護の方向性を記述する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野　精神看護の基礎 精神看護学①, 医学書院.<br>系統看護学講座 専門分野　精神看護の展開 精神看護学②, 医学書院.<br>全人的視点にもとづく精神看護過程第２版, 医歯薬出版株式会社 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 授業出席状況および態度、課題レポートなど総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1 | 精神障害をもつ対象の看護過程の展開 | 1 精神看護学における看護過程の特徴<br>1)全人的な対象の理解<br>精神に障害をもちながら地域で暮らす一人の人間として捉える<br>・人間の尊厳と個人の尊重<br>・継続的な社会生活支援<br>（退院支援、家族支援、就労支援、社会資源の活用）<br>2)強みを活かした看護の実践<br>・レジリエンス、ストレングスの視点 | 講義・演習 |
| 2～3 | | 2 ゴードンの機能的健康パターンを用いた看護過程の展開<br>事例：統合失調症患者の看護<br>1)アセスメント<br>・情報の整理と分析・解釈<br>病識の有無と治療経過、精神症状の有無と日常生活への影響(セルフケア能力や対人関係能力)、サポート体制や社会資源の活用状況 | 講義・演習 |
| 4～5 | | 2)全体像の把握<br>・情報関連図に基づいた対象の全体像と看護の方向性<br>その人らしさや望ましい姿(対象の希望)、生命を脅かすような問題の有無 | 講義・演習 |
| 6 | | 3)看護問題の明確化<br>・看護問題の種類(実在型とリスク型)と優先順位の決め方<br>・看護問題の根拠(原因・要因) | 講義・演習 |
| 7～8 | | 4)看護計画<br>・期待される成果の明確化(看護目標の設定)<br>・個別性(対象のもてる力と強み)の視点<br>5)看護計画の評価の視点<br>・目標到達度の判定、達成度に影響を与えた要因の分析、継続・修正の根拠 | 講義・演習 |

| 科目名 | 看護研究 | 時期 | 3年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員、臨床看護師 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 看護実践の質を高め、科学的根拠に基づく看護実践を行うために、看護研究の基礎を学ぶ。また、ケースレポートの作成をとおして、自己の看護実践を振り返り、論理的思考と研究的態度を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 看護における研究の意義と方法を理解する<br>2 研究のプロセスとその進め方を理解する<br>3 ケースレポートの一連の過程をとおして、論理的思考と研究的態度を養う | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 看護学講座 別巻 看護研究 医学書院<br>看護のためのわかりやすいケーススタディの進め方 照林社 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | ケースレポートの指導状況、提出状況、論文内容・発表の実際等から総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1～2 | 看護における研究の意義 | 1 研究とは何か<br>2 看護研究の意義<br>3 リサーチクエスチョン<br>4 研究における倫理的配慮<br>5 研究デザイン ・質的研究デザインと量的研究デザイン | 講義 |
| 3 | ケースレポートの意義・目的 | 1 ケースレポートとは<br>1)ケースレポートの意義<br>2 ケースレポートの基本構造 | 講義 |
| 4～5 | ケースレポート計画書 | 1 テーマの設定<br>2 計画書の作成<br>1)文献検索・文献検討 | 講義 |
| 6～10 | ケースレポートの実施 | 1 ケースレポート計画書の検討・修正<br>2 ケースレポートの作成<br>1)基礎実習以外で、看護過程を展開した事例<br>3 口演・スライド作成の留意点(プレゼンテーション) | 講義・演習 |
| 11 | 学術集会への参加 | 1 看護系の学術集会へ参加し聴講する | |
| 12～13 | ケースレポート発表準備 | 1 発表原稿作成<br>2 スライド作成<br>3 発表会の運営準備と役割<br>4 発表練習 | 講義・演習 |
| 14～15 | ケースレポート発表会 | 1 発表<br>2 質疑応答<br>3 発表会の運営 | |

| 科目名 | 看護管理と医療安全 | 時期 | 2年次 前期･後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員<br>病院看護管理者　セーフティマネージャー | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 組織として看護を提供する際の看護管理について、基盤となる知識と技術、マネジメント能力を学ぶ。また、安全な看護を提供するために必要な基本的知識と技術を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 看護マネジメントに必要な知識を修得する<br>2 看護を取り巻く諸制度の概要を理解する<br>3 医療安全に向けた日本の対策と組織の安全管理の仕組みを理解する<br>4 事故発生のメカニズムと防止対策、事故分析の方法を理解する<br>5 実習で遭遇しやすい事故とその対策について理解する | | |
| ディプロマ･ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携･協働する力 | | |
| 使用テキスト | ①系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践[1] 看護管理<br>②ナーシング･グラフィカ 医療安全 メディカ出版 | | |
| 技術経験録<br>演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験 課題レポート 演習内容 出席状況から総合的に判断する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方 法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1･2 | 看護ケアのマネジメント | 1 看護ケアのマネジメントと看護職の機能<br>2 患者の権利尊重、安全管理<br>3 多職種協働･連携･チーム医療<br>4 看護業務の実践 | 講義 | 病院看護管理者 |
| 3～5 | 看護職のキャリアマネジメント<br>看護サービスのマネジメント | 1 キャリアとキャリア形成　2 看護職のキャリア形成<br>3 看護専門職としての成長　4 ストレスマネジメント<br>1 看護サービスのマネジメント　2 組織目的達成のマネジメント<br>3 看護サービス提供仕組みづくり　4 人材のマネジメント<br>5 施設･設備環境、物品、情報のマネジメント<br>6 組織におけるリスクマネジメント　7 サービスの評価 | | |
| 6 | マネジメントに必要な知識と技術 | 1 組織とマネジメント　2 リーダーシップとマネジメント<br>3 組織の調整 | | |
| 7 | 看護を取り巻く諸制度 | 1 看護管理に関する法令　2 医療制度 | | |
| 8～10 | 医療安全の取り組みと医療の質の評価 | 1 医療安全の重要性･その取り組み　2 医療事故等の定義･分類<br>3 医療事故の報告制度　4 医療の質の評価 | 講義･演習 | セーフティマネージャー |
| 11･12 | 事故発生のメカニズム,リスクマネジメント<br>看護業務の安全を脅かすリスクと対策 | 1 事故発生のメカニズム　2 事故分析･事故対策<br>3 KYT の実際<br>1 看護業務と事故発生要因<br>2 医療事故の種類と安全対策<br>3 看護職の業務上の危険と対策 | | |
| 13･14 | 看護学生の実習と安全 | 1 実習における事故と法的責任<br>2 実習中の事故発生時の学生の対応<br>3 事例によるリスクアセスメント(実習で遭遇する場面)<br>･シャワー浴介助　･足浴　･移乗介助 等 | 講義･演習 | 専任教員 |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 災害看護と国際看護 | 時期 | 2年次 後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員<br>医師 臨床看護師　その他 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 災害急性期から慢性期の各期における対象への看護及び関係機関との連携等災害看護の基礎を学ぶ。<br>国際社会における看護の必要性を理解し、国内外における国際協力と看護活動を学ぶ。 | | |
| 目 標 | 1 災害及び災害看護に必要な基礎知識を修得する<br>2 災害時のおける看護の特徴及び災害各期の看護について理解する<br>3 世界の健康問題と現状を知り、国際協力の仕組みを理解する<br>4 国際看護の対象を理解し、開発協力及び国際救援における看護について考える | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践[3] 災害看護学・国際看護学 医学書院 | | |
| 技術経験録演習項目 | | | |
| 評 価 | 筆記試験、課題レポート | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方 法 | 担当講師 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 総論 | 病院の災害医療の対策と現状 | 講義 | 医師 |
| 2～4 | 災害及び災害看護に関する基礎的知識 | 1 災害の歴史　2 災害の定義<br>3 災害の種類と健康障害　4 災害医療の特徴<br>5 災害サイクル各期の看護の特徴　5 災害看護と法律<br>6 災害時のこころの変化とケア<br>・被災者 ・遺族 ・救援者 | 講義 | 専任教員 |
| 5～7 | 災害サイクルに応じた看護活動 | 1 災害看護の基本姿勢　2 災害看護におけるアセスメント<br>3 災害サイクル各期における看護活動<br>4 避難所・仮設住宅・復興住宅における看護<br>5 災害関係機関の支援体制 | 講義 | 臨床看護師 |
| | 被災者特性に応じた災害看護 | 1 被災者特性に応じた災害看護<br>・子ども ・妊産婦 ・高齢者 ・障がい者 ・慢性疾患患者 | | |
| | 看護支援活動の実際 | 1 机上トリアージ　2 応急処置と搬送 | 講義・演習 | 臨床看護師 |
| 8 | 国際看護学の現状と課題 | 1 国際看護学とは<br>・世界の健康問題の現状 ・国際看護の対象 | 講義 | 専任教員 |
| 9～11 | 国際協力と看護 | 1 国際協力の仕組み<br>・国際連合システム ・NGO ・ODA<br>2 開発協力・国際救援と看護<br>・人間の安全保障<br>・貧困と健康問題・対策<br>・紛争地における看護 | 講義・演習 | 専任教員 |
| 12・ 13 | 文化を考慮した看護 | 1 日本における在留外国人への看護<br>2 異文化の理解 | 講義・演習 | |
| 14 | 国際看護活動の実際 | 1 国際看護活動の展開プロセス<br>・国際看護活動の実際 | 講義 | 外部講師<br>(JICA) |
| 15 | 終了試験 | | | 専任教員 |

| 科目名 | 臨床看護の実践Ⅱ | 時期 | 3年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 講 師 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間) 回数 | １単位(30 時間) 15 回 |
| 科目の概要 | 多重課題における優先順位の根拠を緊急度や重症度、倫理的視点から判断し、患者一人ひとりの状態・状況に応じた必要な看護を実践するための基本的能力を養う。 | | |
| 目 標 | 1 看護実践場面に応じた安全・安楽、倫理的配慮を考慮した看護を実施する<br>2 複数患者の状態・状況のアセスメントから、優先順位の根拠を考え、場面に応じた臨床判断・看護を実施する | | |
| ディプロマ・ポリシーとの関連 | ☑ 1. 豊かな人間力　☑ 2. 看護を実践する力　☑ 3. 探求する力　☑ 4. 連携・協働する力 | | |
| 使用テキスト | 系統看護学講座 統合分野 看護の統合と実践[1]看護管理 医学書院 | | |
| 技術経験録演習項目 | レベルⅠ インシデント・アクシデント発生時の速やかな報告(63) | | |
| 評 価 | 課題レポート、演習、出席状況などから総合的に評価する | | |

授　業　計　画

| 回数 | 項 目 | 内　容 | 方法 |
|---|---|---|---|
| 1 | 多重課題と優先順位 | 1 多重課題と優先順位<br>2 臨床判断事例ワーク | 講義 |
| 2～5 | 複数患者の行動計画立案 | 1 複数患者の対象理解(事例による検討)<br>1)複数患者の状態・状況の理解(学習)<br>2 複数患者に必要な看護ケアの抽出と優先順位の判断と根拠<br>3 １勤務帯の行動計画立案<br>1)時間管理と業務の組み立て<br>2)PNS ペアとの情報共有 | 講義 |
| 6～8 | 安全・倫理的視点における看護実践 | 1 安全・倫理的視点における看護実践<br>1)事例検討<br>2)演習 | 講義・演習 |
| 9・10 | 臨床判断「気づく・解釈」 | 1 ２年生基礎看護学実習Ⅲ合同演習<br>1)対象の状況から「気づき」を考える<br>2)観察の根拠・方法、必要な情報について考える | 演習 |
| 11 | 統合実習で受け持った事例における優先順位・多重課題 | 1 統合実習で受け持った患者の状態・状況に応じた看護実践<br>1)学生間で受け持った患者の情報共有<br>2)情報からアセスメントし１日の看護計画を立案<br>3)計画した看護の実践 | 講義・演習 |
| 12～15 | 複数患者への看護実践 | 1 複数患者への緊急性・優先順位を考慮した看護実践<br>1)安全性・安楽性<br>2)倫理的配慮<br>2 突発的事案発生時の判断と対応<br>1)協力・支援要請<br>2)報告・連絡・相談<br>3)インシデント・アクシデント発生時の対応<br>・優先順位と根拠　・時間管理<br>4)記録と報告 | レベルⅠ 63<br>演習 |

| 科目名 | 基礎看護学実習Ⅰ | 時期 | 1年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 1単位(35時間) |
| 科目の概要 | 本実習は、看護学生として初めての臨地実習であり、看護師に同行して病棟の構造や設備、療養環境、看護活動を見学し、対象を取り巻く環境および看護師の役割について理解する。対象とコミュニケーションを図り、対象理解を深めるとともに、看護学生として必要な基本的態度および基礎的能力を修得し、今後の学習活動の基盤とする。 | | |
| 目 的 | 看護学の基礎知識を基に、対象の療養環境や看護活動の実際を知るとともに、コミュニケーション技術を含めた看護の対象を理解するための基礎的能力を修得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1 入院している対象の環境を理解する | 1）病棟の構造・設備の特徴を踏まえ、入院している対象の療養環境を説明する<br>2）療養環境を物的・人的視点から捉え、入院している対象に与える影響を説明する<br>3）療養環境における個別性を捉え、対象の状態・反応と関連づけて説明する |
| 2 病棟で行われている看護活動の実際を理解する | 1）療養上の世話の援助内容を対象の状態・反応を関連づけて説明する<br>2）診療上の補助の援助内容を対象の状態・反応を関連づけて説明する<br>3）看護・医療におけるコミュニケーションの目的を説明する<br>4）看護活動における観察の意味を捉え、対象の状態・反応と関連づけて説明する<br>5）看護活動における安全・安楽を捉え、対象の状態・反応と関連づけて説明する<br>6）看護活動における自立・自律を捉え、対象の状態・反応と関連づけて説明する<br>7）看護活動における個別性を捉え、対象の状態・反応と関連づけて説明する |
| 3 看護の対象との関係構築に向けたコミュニケーションを実践する | 1）対象の反応を捉え、接近的コミュニケーションと接近的行動を実践する<br>2）対象の反応を捉え、効果的コミュニケーションを実践する<br>3）自身のコミュニケーションと受け持ち患者の反応を説明する<br>4）自己のコミュニケーションを振り返る |
| 4 看護の対象を理解する | 1）受け持ち患者の入院・疾患・治療に対する思いを説明する<br>2）受け持ち患者の入院前後の生活の違いを説明する<br>3）受け持ち患者の発達段階を説明する<br>4）入院・疾患・治療が受け持ち患者の生活に及ぼす影響を身体的・精神的・社会的側面から分析する<br>5）受け持ち患者に行われている看護活動を対象の状態・反応と関連づけて説明する |
| 5 看護師に求められる役割と自己の課題を明らかにする | 1）実習を振り返り、看護師に求められる役割について説明する<br>2）実習を振り返り、看護師を目指す上での自己の課題を明確にする |
| 6 看護専門職としての倫理的規範を身につける | 1）看護専門職としての倫理的責任を理解し、対象の尊厳と権利を尊重する<br>2）対象のプライバシーを守り、個人情報を適切に管理する<br>3）看護専門職を目指す学習者としての立場を理解し、主体的に学ぶ姿勢を示す<br>4）看護専門職としての責任を自覚し、自身の体調・生活を管理する<br>5）社会人基礎力を意識し、病院と学校の規則を遵守するとともにチームの一員としての自覚を持って行動する |

Ⅱ　実習構成

| 実 習 構 成 | 実 習 場 所 | 実習時間(日数) |
|---|---|---|
| 事前研修 | 学内 | 6.5H |
| 療養環境の理解<br>看護活動の理解<br>対象とのコミュニケーション<br>対象理解 | 県立新発田病院(病棟) | 26H(4日) |
| まとめ | 学内 | 2.5H |

Ⅲ 実習方法

1)学内実習(事前研修・オリエンテーション)

(1)臨地実習全体の概要

(2)基礎看護学実習Ⅰの概要

(3)新発田病院臨地実習指導者との交流会

(4)新発田病院看護部によるオリエンテーション

(5)2年生との交流会(実習における基本的な動きや実習に臨む姿勢について)

(6)学内オリエンテーション

(7)コミュニケーション演習

2)看護師に同行し、実際の看護の場、看護活動を見学する

3)患者とコミュニケーションを図る

4)実習の日程

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 学内ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ<br>事前研修<br>(6.5H)<br>臨地実習全体<br>基礎看護学実習Ⅰについて | 病棟初日<br>病棟ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ<br>看護師に同行<br>患者とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ | 病棟2日目<br><br>看護師に同行<br>患者とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ | 病棟3日目<br><br>看護師に同行<br>患者とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ | 病棟4日目<br>最終ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ<br>看護師に同行<br>患者とｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ |
| 6日目 | | | | |
| 学内まとめ<br>(2.5H) | 記録提出 | | | |

5)最終カンファレンス

・病棟実習最終日に病棟にて、学生・臨地実習指導者・教員で行う

・テーマ「看護師に求められる役割と自己の課題」

6)学内実習(まとめ)

・実習目標に基づき、以下の内容について実習グループで意見交換し、まとめる

【内容(例)】

〇療養環境

〇看護活動

〇コミュニケーション

〇対象理解

〇看護師に求められる能力

〇今後の課題

Ⅳ 実習記録

基礎看護学実習Ⅰの様式による

Ⅴ 実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 基礎看護学実習Ⅱ | 時期 | 2年次　前期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 1単位(35 時間) |
| 科目の概要 | 本実習では、基礎看護学実習Ⅰで修得した患者を取り巻く環境への理解、対象理解のためのコミュニケーション技術等の内容をふまえて、健康障害により入院生活を送っている対象を受け持ち、信頼関係を基盤とした援助的な関係性を築きながら機能的健康パターンを用いて対象を理解する。既習の知識、技術から受け持ち患者のバイタルサイン測定、根拠ある観察、対象に必要な環境整備を実践する。また、対象に行われている看護の実際を見学または一部介助し、その根拠と意味を帰納的に考え学ぶことを目的とする。本実習で学ぶ看護の思考を、基礎看護学実習Ⅲで実践する看護過程のプロセスへと繋げることを目的とする。さらに、本実習をとおして、看護専門職としての共感的態度及び倫理に基づいた看護を実践する基礎的能力を養うことを目的とする。 | | |
| 目 的 | 健康障害をもつ対象を受け持ち、機能的健康パターンを用いて対象を理解し、看護の実際から根拠と意味を学ぶとともに、看護専門職としての共感的態度及び倫理に基づいた看護を実践する基礎的能力を養う。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実　習　目　標 | 行　動　目　標 |
|---|---|
| 1　対象を尊重し、援助的な人間関係を構築する | 1）対象に深い関心を寄せ、対象の価値観を尊重した態度で接する<br>2）対象の状況・状態に応じたコミュニケーション技法を考え行動する<br>3）対象の示す言語的・非言語的コミュニケーションの意味を考え、反応する<br>4）対象との援助的な人間関係を構築する |
| 2　機能的健康パターンの一部分を用いて対象を分析・解釈する | 1）コミュニケーション技術を活用しながら、対象理解に必要な情報を収集する<br>2）対象が抱える病態・症状、機能障害、治療内容、治療経過を分析・解釈する<br>3）得られた情報を機能的健康パターンの枠組みに分類・整理する<br>4）対象の健康障害が日常生活行動に及ぼす影響を分析・解釈する |
| 3　機能的健康パターンの分析・解釈から、フィジカルアセスメントを実践する | 1）正確にバイタルサイン測定を実践する<br>2）機能的健康パターンの分析・解釈から、根拠を考えたフィジカルアセスメントを述べる<br>3）機能的健康パターンの分析・解釈から、対象の症状や苦痛に配慮してフィジカルアセスメントを実践する |
| 4　機能的健康パターンの分析・解釈から、対象に必要な環境整備を実践する | 1）機能的健康パターンの分析・解釈から、対象に必要な環境整備を述べる<br>2）機能的健康パターンの分析・解釈をふまえ、環境整備を実践する<br>3）対象の症状や苦痛に配慮して環境整備を実践する<br>4）実践した環境整備を客観的に振り返る |
| 5　機能的健康パターンの分析・解釈をふまえ、看護の実際から看護援助の根拠を考える | 1）対象に行われている看護援助を見学または一部介助し、どのような配慮・工夫がされているかを説明する<br>2）対象に行われている看護援助で、配慮・工夫されていた根拠を説明する<br>3）根拠をふまえた看護援助の意義について述べる |
| 6　看護専門職として、倫理に基づいた言動・行動・態度を身につける | 1）実習中に知り得た患者・家族及び医療者の情報等に関して守秘義務を守る<br>2）対象の尊厳及び権利を尊重した言動・行動・態度を示す<br>3）主体的に学習し、対象への看護を追求する姿勢を示す<br>4）看護専門職としての自覚を持ち、主体的に報告・連絡・相談する<br>5）自己を客観的に日々省察し、自己の課題を見出す |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実　習　場　所 | 実習時間（日数） |
|---|---|---|
| 学内実習 | 学内 | 6H |
| 健康障害のある対象の理解と援助 | 県立新発田病院（病棟） | ２6H |
| 学内実習（まとめ） | 学内 | 3H |

Ⅲ　実習方法

1）学内実習（オリエンテーション）

（1）基礎看護学実習Ⅱの内容についてオリエンテーションを受ける。

（2）バイタルサイン測定の技術を各自復習・練習しておく。

2）対象を受け持ち、機能的健康パターンを用いて理解する。

（1）実習１日目、カルテから必要な情報を収集し対象理解を深める。対象と関係構築を図り、看護師が実践するバイタルサイン測定・フィジカルアセスメントを見学する。

（2）実習２日目より、対象と関係構築を図りながら、必要なバイタルサイン測定・フィジカルアセスメントを実践する。

（3）対象に実践されている看護援助を見学または一部介助しながら、看護援助の根拠を考える。

3）実習の日程　【事前オリ３H】

| １日目 | 2日目【6. 5H】 | 3日目【6. 5H】 | 4日目【6. 5H】 | 5日目【6. 5H】 |
|---|---|---|---|---|
| 学内オリエンテーション(3H)<br>病棟で、PC 使用方法、受け持ち患者の情報収集をカルテから実施する<br>＊時間をずらして教員とともに病棟へ向かう | 病棟 1 日目<br>病棟オリエンテーション<br>受け持ち患者への挨拶<br>受持ち患者の看護援助見学<br>バイタルサイン測定、フィジカルアセスメント<br>情報収集と分析・解釈<br>環境整備の実践 | 病棟 2 日目<br>看護実践場面から、根拠を考える。 | 病棟 3 日目 | 病棟 4 日目 |
| 6日目 | | | | |
| 学内まとめ(3H) | 記録提出 | | | |

3）最終カンファレンス

・病棟実習最終日に病棟にて、学生・臨地実習指導者・教員で行う。

4）学内実習（まとめ）

・実習目標に基づいて気づきや学びを意見交換（グループワーク）し、自己の課題を明確にする。

Ⅳ　実習記録

基礎看護学実習Ⅱの様式による。

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する。

| 科目名 | 基礎看護学実習Ⅲ | 時期 | 2年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間) |
| 科目の概要 | 基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱで修得した関係構築、対象理解の内容をふまえ、既修の知識・技術、看護過程を用いて対象の個別性に応じた看護を実践する。また、本実習を通して、看護専門職としての基本的な態度や倫理を含む基盤的な看護実践能力を養い、自己の課題を明確にし、続いて行われる領域別看護学実習を展開するための土台とする。 | | |
| 目 的 | 健康障害を持つ対象を受け持ち、看護過程の技法を用いて対象の個別性に応じた看護を実践するための基礎的能力と看護職として必要な態度を修得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1　対象理解に繋げる関係性を構築する | 1）対象が発するメッセージの意味や感情の理解を深め、相互に信頼できる関係性を築くための言動・行動・態度を示す<br>2）看護に繋がる必要な情報を引き出すコミュニケーションを図る<br>3）対象理解に必要な情報を適した方法から意図的に収集する |
| 2　ゴードンの機能的健康パターンを用いて対象を総合的にアセスメントする | 1）得られた情報をゴードンの機能的健康パターンの枠組みに分類・整理する<br>2）対象の疾患の病態生理や機能障害のメカニズム、治療経過をふまえて分析・解釈する<br>3）対象の健康障害が日常生活行動に及ぼす影響を分析・解釈する<br>4）分析・解釈した内容を情報関連図として記述する<br>5）情報関連図をもとに対象の全体像を把握し、看護の方向性を記述する |
| 3　対象の看護問題を明確にする | 1）看護問題の原因（関連因子・危険因子）・要因を記述する<br>2）看護問題に対処しなかった場合の成り行きを記述する<br>3）看護問題に関連する対象の対処能力（もてる力）を記述する<br>4）看護問題は関連因子や危険因子をふまえて表記している |
| 4　対象の看護問題を解決するための看護計画を立案する | 1）看護問題を解決するための長期目標を設定している<br>2）短期目標（期待される成果）は評価可能な行動レベル（現実的、判定・測定可能、行動可能、達成可能）に即して記述する<br>3）目標達成に向けて、対象の個別性（希望・安全性・安楽性・自立性等）を反映した具体策を記述する |
| 5　立案した看護計画の具体策を科学的根拠に基づき、安全・安楽・自立に配慮して実施する | 1）実施する援助の必要性や根拠を対象の状態をふまえて説明する<br>2）対象に援助内容・方法を説明し、了承を得る<br>3）対象の状況に応じた安全・安楽を考慮して実施する<br>4）対象のプライバシーに配慮して実践する<br>5）実施した看護を対象の反応や援助結果をふまえて記述する |
| 6　実施した看護を評価する | 1）日々の看護実践で振り返ったことを翌日の看護実践と看護計画の追加・修正に活かす<br>2）一連の看護実践を振り返り、看護目標の評価とその要因、介入の妥当性について根拠をふまえて振り返る |
| 7　看護専門職として主体的かつ継続的に学ぶ姿勢を身につける | 1）個人情報を適切に管理するとともに守秘義務を遵守する<br>2）主体的かつ継続的な学習により自己の能力維持・開発に努める<br>3）看護チームの一員としての自覚をもち、適切な報告・連絡・相談ができる |
| 8　実習を通して学んだことを振り返り、自己の課題を明らかにする | 1）看護実践の体験を通して、自身の考える看護について参考・引用文献を用いて記述する<br>2）実習全体を振り返り、自己の今後の課題を記述する |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間 |
|---|---|---|
| 学内実習 | 学内 | １１．５H |
| 健康障害をある対象の看護 | 県立新発田病院（病棟） | ５８．５H |

Ⅲ　実習方法

１）１日目の学内実習では、実習オリエンテーションを実施する。また、２日目の学内実習では、病棟別オリエンテーションと受け持ち患者情報に基づいて自己学習を行う。

２）病棟実習では、対象を受け持ち、看護過程を展開し、看護を実践する。

３）４日目の午後は、学内にて情報整理・分析、情報関連図をまとめ、対象の理解に繋げる。

３）１２日目の学内実習では、実習目標に基づいて気づきや学びを意見交換（グループワーク）し、自己の課題を明確にする。

４）実習日程及び内容

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 |
|---|---|---|---|
| 学内実習（3H）<br>・実習オリエンテーション | 学内実習（3H）<br>・病棟別オリエンテーション | 病棟実習①<br>・病棟オリエンテーション<br>・受け持ち患者の情報収集や援助の実際の見学 | 病棟実習② |
| 5日目 | 6日目 | 7日目 | 8日目 |
| 病棟実習③ | 病棟実習④<br>PM:学内 | 病棟実習⑤<br>・看護の方向性カンファレンス | 病棟実習⑥<br>・看護計画カンファレンス |
| 9日目 | １０日目 | １１日目 | １２日目 |
| 病棟実習⑦<br>・看護計画カンファレンス（予備日） | 病棟実習⑧ | 病棟実習⑨<br>・最終カンファレンス | 学内実習（5.5H） |
| | | | |
| 記録提出 | | | |

５）カンファレンス

・毎日のカンファレンス（15時30分～16時）は学内で実施する。テーマはメンバーで相談し、リーダーと担当教員で打合せする。（例：患者との関わりで困っていること、看護過程の展開で困っていること）

・看護の方向性カンファレンスおよび看護計画カンファレンスについては、病棟で臨地実習指導者を交えて実施する。

Ⅳ　実習記録

基礎看護学実習Ⅲの様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 地域・在宅看護論実習 | 時期 | ３年次　前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 科目の概要 | 地域で暮らす看護の対象が抱える生活上の課題を理解し、地域包括ケアシステムにおける地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションの機能と役割の実際から住み慣れた地域で療養生活を継続するための医療・介護・福祉チームの連携と看護の役割について学ぶ。 | | |
| 目 的 | 地域で暮らす看護の対象を理解し、地域・在宅看護を実践するために必要な知識・技術・態度を修得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1 地域包括支援センターを必要とする対象が抱える課題と支援体制の実際を理解する | 1）地域包括支援センターを必要とする対象の特徴と生活上の課題解決に向けた社会資源の活用方法を説明する<br>2）地域包括ケアシステムにおける地域包括支援センターの機能と役割の実際を説明する |
| 2 居宅介護支援事業所を利用する対象が抱える課題と在宅療養を支えるケアマネジメントの実際を理解する | 1）居宅介護支援事業所を利用する対象の特徴と生活上の課題解決に向けた社会資源の活用方法を説明する<br>2）地域包括ケアシステムにおける居宅介護支援事業所の機能と役割の実際を説明する |
| 3 訪問看護ステーションを利用する対象が抱える課題と在宅療養を支える看護の実際を理解する | 1）訪問看護を利用する療養者・家族の心身機能の特徴を説明する<br>2）訪問看護を利用する療養者・家族の生活環境を説明する<br>3）訪問看護を利用する療養者・家族の社会資源の活用方法を説明する<br>4）訪問看護ステーションで立案されている看護問題の背景要因を分析する<br>5）訪問看護ステーションで立案されている看護目標の設定理由を分析する<br>6）訪問看護ステーションで立案されている看護計画の根拠を分析する<br>7）療養者・家族を一単位として捉え、在宅看護における支援内容を説明する<br>8）療養者・家族の意思・生活状況を踏まえ、主体性を尊重した支援内容を説明する<br>9）療養者・家族のセルフマネジメント能力を分析し、生活状況に応じた支援内容を説明する<br>10）療養者・家族のリスクマネジメント能力を分析し、生活状況に応じた支援内容を説明する<br>11）地域包括ケアシステムにおける訪問看護ステーションの機能と役割の実際を説明する |
| 4 地域包括ケアシステムにおける医療・介護・福祉チームの連携の実際と看護の役割を考察する | 1）地域包括支援センターにおける医療・介護・福祉チームの連携の実際を説明する<br>2）居宅介護支援事業所における医療・介護・福祉チームの連携の実際を説明する<br>3）訪問看護ステーションにおける医療・介護・福祉チームの連携の実際を説明する<br>4）地域包括ケアシステムを推進する上でのチームにおける看護師の役割について説明する<br>5）訪問看護の特性から地域・在宅看護に求められる役割について考察する<br>6）地域・在宅看護の現状と今後の課題を考察する |
| 5 地域・在宅看護を実践するために必要な倫理観と基本的な技術・態度を身につける | 1）地域・在宅看護を実践する看護職に求められる倫理観を理解し、行動・態度で示す<br>2）地域・在宅看護に必要な知識および技術を修得する機会を主体的に求める<br>3）地域・在宅看護の対象の身体的・心理的・社会的特徴を踏まえ、生活者としての尊厳を尊重したコミュニケーションを実践する |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間 |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内 | 3H |
| 地域包括支援センターの機能と役割 | 地域包括支援センター | 7.5H |
| 居宅介護支援事業所におけるケアマネジメント | 居宅介護支援事業所 | 7.5H |
| 訪問看護ステーションにおける看護 | 訪問看護ステーション | 47H |
| 実習のまとめ | 学内 | 5H |

Ⅲ 実習方法

1)学内オリエンテーションでは、実習目的、達成目標を確認し、施設の概要、留意事項の説明を受ける。

2)地域包括支援センターでは、専門職(主任ケアマネジャー・社会福祉士・保健師または看護師)に同行し、地域の実情、施策に合わせた活動内容を見学する。

3)居宅介護支援事業所では、ケアマネジャーに同行し、療養者の居宅(自宅または施設)を訪問してモニタリングやサービス担当者会議等を見学する。

4)訪問看護ステーションでは、訪問看護師に同行し、療養者の居宅(自宅または施設)を訪問して看護活動の実際を見学する。また、学生が実施可能な援助は、訪問看護師の見守りのもと実践する。

5)訪問看護ステーションでは、実習期間中の訪問事例から１事例選定し、看護上の問題、看護目標、看護計画の内容を分析する。

6)実習施設ごとに施設の担当者と共に学びのカンファレンスを実施する。

7)最終日の学内では、各施設の学びを共有する。

8)実習の日程(各実習グループにより日程が異なる)

| １日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 実習オリエンテーション<br>（3H） | 地域包括支援センター<br>（7.5H）<br>学びのカンファレンス | 居宅介護支援事業所<br>（7.5H）<br>学びのカンファレンス | 訪問看護ステーション<br>（8H） | 訪問看護ステーション<br>（5H） |
| 6日目 | 7日目 | 8日目 | 9日目 | 10日目 |
| 訪問看護ステーション<br>（8H） | 訪問看護ステーション<br>（5H） | 訪問看護ステーション<br>（8H） | 訪問看護ステーション<br>（5H） | 訪問看護ステーション<br>（8H）<br>学びのカンファレンス |
| 11日目 | | | | |
| 学内<br>（5H） | 記録提出 | | | |

Ⅳ 実習記録

地域・在宅看護論実習の記録様式を使用する

Ⅴ 実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 成人･老年看護学実習Ⅰ | 時期 | 2年次　後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 実習概要 | 回復期･慢性期にある成人期または老年期の対象の健康レベルとライフサイクルからみた成人期･老年期の発達段階を理解し、看護過程の展開を通して対象とその家族への看護を実践し、必要な能力を養い、回復期･慢性期看護のあり方を学ぶ。また、健康障害を受容し、セルフケア及びセルフマネジメント能力獲得に向けた支援と健康の維持･増進と対象を支えるための保健･医療･福祉における看護の役割とチーム体制を理解する。 | | |
| 目 的 | 回復期･慢性期にある成人期または老年期の対象とその家族を理解し、セルフケア･セルフマネジメントの獲得を促す看護を実践するための基本的な知識･技術･態度を修得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実　習　目　標 | 行　動　目　標 |
|---|---|
| 1　回復期・慢性期にある対象への支援の特徴を理解し、セルフケア及びセルフマネジメントの状況をアセスメントし、対象の全体像を把握し、看護上の問題を明確化する | 1）対象の病態情報を収集し要約してアセスメントする<br>2）ゴードンの機能的健康パターンの枠組みを用いて情報を体系的に分類する<br>3）成人・老年各期の身体機能・心理社会的機能をふまえ対象の状況をアセスメントする<br>4）対象の病態と身体機能・心理社会的機能をふまえ、対象の状況をアセスメントする<br>5）対象の病態や健康障害、生活や心理社会文化的影響について情報を関連付けながら統合して全体像を説明する<br>6）慢性期・回復期にある対象の実在型、リスク型問題を明確化する |
| 2　対象や家族にとってのセルフケア及びセルフマネジメントを支援する看護計画を立案する | 1）根拠をもって健康問題の優先順位を決定する<br>2）対象の意見や希望を考慮しながら、対象に応じた長期目標と短期目標を設定し説明する<br>3）対象の意見や希望を考慮しながら、根拠に基づいた個別的かつ具体的な看護計画を立案する |
| 3　計画した看護援助を対象の状況に合わせて実施し、客観的かつ対象の立場の視点で評価する | 1）実施する看護について対象に合わせた説明をする<br>2）対象の反応に合わせて、安全、安楽、個別性を考えながら計画に基づいて実施する<br>3）対象・家族の話をよく聞き、理解すると共に、自分の考えや思いを相手に分かるように伝える<br>4）対象やその家族の自己効力感に着目し、対象の意欲に応じた関わりを実施する<br>5）対象の入院中および退院後における生活の再構築（または機能維持・悪化予防）に向けた援助を、セルフケア及びセルフマネジメント理論による根拠に基づき実施する<br>6）日々設定した看護目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかを客観的に評価し必要に応じて計画を追加・修正する<br>7）一連の看護実践を振り返り、設定した看護目標の評価とその要因、介入の妥当性について根拠をふまえて振り返る<br>8）対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を習得する機会を求める |
| 4　対象と家族がセルフケア及びセルフマネジメントにより自分らしい生活を実現するための看護の価値を考察する | 1）看護実践場面をもとに、セルフケア及びセルフマネジメントによる自分らしい生活に向けた看護で大切なことについて自己の考えを示す<br>2）疾病や障害を持ちながら生きる人やその家族の思い、生活を支えるための看護師の役割について自己の考えを示す |
| 5　看護専門職としてふさわしい態度を身につける | 1）必要に応じて、学生間・医療スタッフ・教員と情報共有・意見交換・報告・連絡・相談を適切に行う<br>2）主体的に実習に臨み、周囲への影響を考慮した行動をとる（身だしなみ、言葉使い、挨拶、約束・ルールを守る、学習、カンファレンス、自己の心身の健康管理など）<br>3）対象や家族の尊厳を守り、誠実な態度で対応する<br>4）カンファレンスに積極的に参加し、主体的に学習を進める |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間 |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内 | 5H |
| 回復期・慢性期にある患者の看護 | 県立新発田病院（病棟） | 65H |

Ⅲ　実習方法

1）実習オリエンテーションでは、患者選定と事前学習、回復期・慢性期の看護に関する事前学習を行う

2）回復期・慢性期にある対象を受け持ち、セルフケア及びセルフマネジメント能力獲得を推進するための看護を看護過程に沿って展開する

3）実習の日程

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 学内ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ<br>（5H）患者選定 | 病棟ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ | | | |
| 6日目 | 7日目 | 8日目 | 9日目 | 10日目 |
| 看護の方向性ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 看護計画ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 看護計画ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ<br>中間評価 | ﾃｰﾏｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | ﾃｰﾏｶﾝﾌｧﾚﾝｽ |
| 11日目 | | | | |
| 最終ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 記録提出 | | | |

3）テーマカンファレンスの内容

テーマカンファレンス：テーマに合わせて実践内容をもとにメンバーが意見を出し合う

・病棟実習８日目９日目どちらかに学内で実施する。学生・教員で行う。

・下記内容を参考にグループで深めたいテーマを検討する。カンファレンス前に事前学習を行い、各自必要な資料を準備する。

・グループリーダーがメンバーと話し合い前日までにテーマを決め教員に報告する。

【テーマの例】

〇エンパワメントを考えた支援

〇セルフケアの獲得とセルフマネジメントを推進する看護実践

〇合併症と二次障害を予防する看護

〇行動変容を促進する看護アプローチ

〇退院後の生活を意識した支援

〇もてる力をいかして看護をすること

〇社会資源（ソーシャルサポート）の活用

Ⅳ　実習記録

成人・老年看護学実習Ⅰの様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 成人･老年看護学実習Ⅱ | 時期 | ３年次　前期･後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 実習概要 | 周手術期や生命の危機状態にある対象の健康レベルとライフサイクルからみた成人期･老年期の発達段階を理解し、対象とその家族の状態･状況に応じた看護を実践するために必要な能力を養い、急性期看護のあり方を学ぶ。受け持ち患者の手術見学および集中治療室 ICU･CCU での見学実習を通して急性期における看護実践方法･役割、チーム医療について考えを深める。 | | |
| 目 的 | 急性期にある対象とその家族を理解し、生命維持･健康回復への看護を実践するための知識･技術･態度を修得する | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1　周手術期にある対象への支援の特徴を理解し、術前・術中・術後の生体反応や合併症予防、日常生活の自立/自律の状況をアセスメントし、対象の全体像を把握し、看護上の問題を明確化する。 | 1）周手術期にある対象の病態情報を収集し要約してアセスメントする<br>2）ゴードンの機能的健康パターンの枠組みを用いて情報を体系的に分類する<br>3）成人・老年各期の身体機能・心理社会的機能をふまえ対象の状況をアセスメントする<br>4）周手術期の病態と心理社会的機能をふまえ、対象の状況をアセスメントする<br>5）周手術期の病態や健康障害、生活や心理社会文化的影響について情報を関連付けながら統合して全体像を説明する<br>6）周手術期にある対象の実在型、リスク型問題を明確化する |
| 2　術前・術中・術後の合併症予防や日常生活の自立/自律を支援する看護計画を立案する | 1）根拠をもって健康問題の優先順位を決定する<br>2）対象の意見や希望を考慮しながら、対象に応じた長期目標と短期目標を設定し説明する<br>3）対象の意見や希望を考慮しながら、根拠に基づいた個別的かつ具体的な看護計画を立案する |
| 3　計画した看護援助を対象の状況に合わせて実施し、客観的かつ対象の立場の視点で評価する | 1）実施する看護計画について対象に合わせた説明をする<br>2）対象が心身ともに最良の状態で手術を受けられるような援助を考え記述する<br>3）術中の状況・様子をふまえ、術後の適切な観察を実施する<br>4）離床に伴う不安・苦痛に共感しながら、術後の合併症を予測し予防するための援助を実施する<br>5）自立した退院後の生活の再構築を目指し、急性期から回復期に応じた援助を実施する<br>6）日々設定した看護目標や計画、実践が対象にとって最良の状態であるか客観的に評価し必要に応じて計画を追加修正する<br>7）一連の看護実践を振り返り、看護目標の評価とその要因、介入の妥当性について根拠をふまえて振り返る<br>8）対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を求める |
| 4　手術を受ける対象・家族が健康回復に向かうための看護の価値を考察する | 1）具体的な看護実践場面を通して、手術を受ける対象・家族が健康回復に向かうための看護で大切なことについて自己の考えを示す<br>2）周手術期における看護師の役割について自己の考えを示す |
| 5　救命救急センターの機能と役割、急性期の状態にある対象および家族への看護を理解する | 1）急性期における看護実践の根拠や看護上の留意点、倫理的配慮を説明する<br>2）救命センターの機能と役割、急性期の状態にある対象および家族への看護に対する自己の考えを示す |
| 6　看護専門職としてふさわしい態度を身につける | 1）必要に応じて、学生間・医療スタッフ・教員と情報共有・意見交換・報告・連絡・相談を適切に行う<br>2）主体的に実習に臨み、周囲への影響を考慮した行動をとる（身だしなみ、言葉使い、挨拶、約束・ルールを守る、学習、カンファレンス、自己の心身の健康管理など）<br>3）対象や家族の尊厳を守り、誠実な対応をする<br>4）カンファレンスに積極的に参加し、主体的に学習を進める |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間 |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内 | 5H |
| 周手術期にある対象への看護 | 県立新発田病院（病棟・手術室） | 58.5H |
| 生命の危機状態で集中治療を要する対象への看護 | 県立新発田病院（集中治療室 ICU・CCU） | 6.5H |

Ⅲ　実習方法

1）実習オリエンテーションでは、患者選定と関連する事前学習、手術室看護、ICU・CCU に関する事前学習を行う

2）周手術期（術前・術後）にある対象を受け持ち、看護過程のプロセスに沿って実習を展開する

3）受持ち患者の手術を見学し、術中の状況・様子をふまえ、術後の適切な観察を実施する

4）救命救急センター（ICU・CCU）の看護師に同行し、生命の危機状態にあり集中治療を要する対象および家族への看護を見学する

5）実習の日程

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 学内ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ<br>（5H）患者選定 | 病棟ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ | | | 看護の方向性ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ |
| 6日目 | 7日目 | 8日目 | 9日目 | 10日目 |
| 看護計画ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 看護計画ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 中間評価 | | 最終ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ |
| 11日目 | | | | |
| 集中治療室 ICU･CCU<br>見学実習<br>学びのカンファレンス | 記録提出 | | | |

5）カンファレンス

（1）最終カンファレンス

・病棟実習最終日に病棟にて、学生・臨地実習指導者・教員で行う

・テーマ例「手術を受ける対象・家族が健康回復に向かうための看護で大切なこと」

（2）集中治療室 ICU・CCU：学びのカンファレンス

・ICU・CCU 実習時間内に臨地にて、学生・臨地実習指導者・教員で行う

・テーマ例「救命救急センターの看護の機能と役割について」

Ⅳ　実習記録

成人・老年看護学実習Ⅱの様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 成人･老年看護学実習 Ⅲ | 時期 | 3年次 前期･後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 実習概要 | 人生の最終段階にある対象とその家族を身体的、精神的、社会的、霊的(スピリチュアル)、文化的側面から総合的に捉え、看護過程の展開を通して対象の QOL 維持･向上にむけた看護を学ぶ。対象とその家族のライフスタイルと生活環境を踏まえたその人らしい生活のあり方を捉え、終末期･治癒及び回復が困難な状態にある対象とその家族への看護師の役割･機能を考える。 | | |
| 目 的 | 終末期･治癒及び回復が困難な状態にある対象とその家族を理解し、その人らしく安楽に過ごせるような看護を実践するための知識･技術･態度を習得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1 成人期・老年期の終末期・治癒及び回復が困難な状態にある対象と家族を理解する | 1）終末期・治癒及び回復が困難な状態にある成人期・老年期の対象の発達段階や病状の理解に関する情報を収集する<br>2）対象の身体的・心理的・社会的・霊的(スピリチュアル)、文化的側面から情報収集し説明する<br>3）これまでのライフスタイルと生活環境をふまえ、その人らしい生活のあり方を説明する |
| 2 終末期・治癒及び回復が困難な状態にある対象の健康問題を理解する | 1）対象に生じている器質的変化・機能的変化、症状を、解剖生理、病態生理、機能障害のメカニズムの知識に基づき説明する<br>2）対象への検査・治療・処置の目的とそれが身体的・心理的・社会的・霊的(スピリチュアル)･文化的側面に及ぼす影響について説明する<br>3）健康障害や治療が対象の日常生活に及ぼす影響について説明する<br>4）対象が、疾病や治療による状態の変化と影響をどのように受け止め対処しているか説明する<br>5）予測される機能変化や合併症とその対応について説明する<br>6）対象の身体・生活・心理・スピリチュアル・社会・文化的視点、全人的苦痛の視点からの情報を系統的に関連付け、統合的に分析・解釈する<br>7）系統的に分析・解釈した内容から全体像を説明する<br>8）アセスメントを統合し、全人的苦痛、QOL、その人らしさ、安楽の観点から看護の方向性を決定する |
| 3 終末期・治癒及び回復が困難な状態にある対象の健康状態や状況に応じた看護を実践する | 1）健康問題の根拠を原因・誘因、成り行きから分析し看護の方向性を決定する<br>2）QOL の考えに基づき対象やその家族の選択権、自己決定権を尊重し実現可能な目標を対象や家族とともに共有する<br>3）対象の身体・生活・心理・社会・文化的特徴と科学的根拠に基づいた個別的な看護計画を立案する<br>4）日々対象の症状・反応の変化を観察しながら、個別的で安全・安楽・自立に配慮した援助を実施する<br>5）対象や対象の家族の全人的苦痛を最小限にするために安楽に向けた援助を実施する<br>6）対象の希望や思いを考慮した上で、状態の変化を把握し、必要に応じて方法の変更や中止を検討する<br>7）日々設定した目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかどうかを評価し修正する<br>8）実施した援助を客観的に振り返り、根拠をふまえ批判的かつ論理的に吟味して根拠に基づき看護計画を評価する |
| 4 看護専門職として多職種と連携・協働する必要性を理解する | 1）終末期・治癒及び回復が困難な状態にある対象に応じた多職種協働によるチームアプローチの必要性を説明する<br>2）対象と家族に応じた療養の場への移行に伴う必要な援助を説明する<br>3）保健・医療・福祉チームの一員として看護の役割がわかり自己の考えを述べる |
| 5 対象への看護実践を通して、看護に対する価値を見出す | 1）終末期・治癒及び回復が困難な状態にある対象と家族の看護において、看護師としてどのような態度であるべきか文献を用いて自己の考えを述べる<br>2）対象の看護実践場面をもとに対象の安楽に向けた看護で大切なことについて文献を用いて自己の考えを述べる |

| | |
|---|---|
| 6 看護専門職としてふさわしい態度を身につける | 1）主体的に実習に臨み、周囲への影響を考慮した行動をする（身だしなみ、言葉遣い、挨拶、約束・ルールを守る、学習、カンファレンス、自己の心身の健康管理など）<br>2）対象や家族の尊厳を守り、誠実な対応をする<br>3）必要に応じて、学生間・医療スタッフ・教員と情報共有・意見交換・報告・連絡・相談を適切に行う |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間（日数） |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内 | 5H　（1日） |
| 終末期にある対象と家族の看護 | 県立新発田病院（病棟） | 65H　（10日） |

Ⅲ　実習方法

1）実習オリエンテーションでは患者選定と事前学習、必要時技術演習を実施する。

2）病棟実習では終末期・治癒及び回復が困難な対象とその家族を受け持ち、看護過程を展開する。

3）受け持ち対象がいない場合は同行実習を行う。

4）実習の日程

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 学内オリエンテーション(5H) | 病棟オリエンテーション<br>患者を受持ち看護過程のプロセスにそって実習展開 | | | 看護の方向性カンファレンス |
| 6日目 | 7日目 | 8日目 | 9日目 | 10日目 |
| 看護計画カンファレンス | 看護計画カンファレンス | 中間評価 | テーマカンファレンス | |
| 11日目 | | | | |
| 最終カンファレンス | 記録提出 | | | |

5）テーマカンファレンス

・終末期・治癒及び回復が困難な状態にある対象と家族の看護において、看護師としてどのような態度であるべきか自己の考えをカンファレンス時に述べる（レポートあり）

・カンファレンス前にレポートを記載し、各自必要な資料を準備する。

Ⅳ　実習記録

成人・老年看護学実習 Ⅲ の様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 老年看護学実習 | 時期 | 3年次 前期・後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 科目の概要 | 老年期における対象の生活史や生きてきた時代背景に興味・関心を持ち、多様性・価値観を尊重したコミュニケーションを学ぶ。高齢者を生活者として捉え、生活機能の観点から看護過程を展開する。また、加齢変化と疾患により、その人らしい生活を妨げる健康問題と対象の“もてる力”を理解し、健康逸脱から回復促進、QOL 維持・向上にむけた看護を学ぶ。高齢者と家族を取り巻く環境を理解し、多様な生活の場を支えるための保健・医療・福祉の役割と多職種連携・協働の必要性を学ぶ。 | | |
| 目 的 | 老年期にある対象者とその家族を理解し、多様な生活・療養の場に向けた看護の基礎となる知識・技術・態度を修得する | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1　老年期にある対象の特徴を捉え、その人らしい生活を送る上での健康問題と“もてる力”を理解する | 1）対象のこれまでの生活環境・生活行動についての情報を収集する<br>2）老年期の特徴と疾患・入院・治療を捉え、身体的、心理・霊的、社会・文化的側面から情報を収集する<br>3）入院に伴いその人らしい生活を妨げる要因を身体的、心理・霊的、社会・文化的側面から分析する<br>4）対象の健康逸脱から回復促進に向けたもてる力を分析する<br>5）老年期にある対象を生活者として捉え、その人らしい生活のあり方を分析する<br>6）老年期にある対象のその人らしい生活に影響を与える原因・誘因を分析し、健康問題で説明する |
| 2　老年期にある対象の生活機能に着目し、その人らしい生活に向けた看護計画を立案する | 1）加齢変化と病態による生活への影響を考え、病態・生活機能関連図で説明する<br>2）対象のもてる力と、生活に及ぼす影響を踏まえて看護の焦点を明らかにする<br>3）その人らしい生活に影響を及ぼす看護の焦点の優先度を生活機能の観点から決定する<br>4）看護の焦点について根拠、成り行きを説明し、長期目標と短期目標を設定し説明する<br>5）対象のもてる力を活かした根拠のある看護計画を立案する<br>6）対象の特徴と反応を踏まえ、実施する看護の根拠・目的・方法について説明する<br>7）対象の健康状態を把握し、必要に応じて援助の変更や中止を検討する<br>8）対象の反応から実践した看護を振り返り、必要に合わせて看護計画を追加・修正する |
| 3　老年期にある対象の“もてる力”を活かし、対象の状態に応じた援助を実践し、評価する | 1）対象の生活史や生きてきた時代背景を踏まえ、人格・尊厳・価値観を尊重したコミュニケーションを実践する<br>2）対象のその人らしい生活や QOL の維持・向上を踏まえた看護を実践する<br>3）対象のもてる力、自立の視点で援助を実践する<br>4）対象の健康状態・状況に合わせて安全・安楽に留意した援助方法を選択し、対象の反応を捉えながら実践する<br>5）対象のその人らしい生活と生活機能を踏まえた一連の看護実践を振り返り、看護目標の評価とその要因、介入の妥当性について根拠を踏まえて総合的に評価する |
| 4　介護老人福祉施設やデイサービスを利用し、地域で生活する高齢者の実際と看護の役割を理解する | 1）介護老人福祉施設の利用者のケア環境と施設における看護の役割、多職種連携・協働について説明する<br>2）デイサービスの利用目的とケア環境から高齢者の生活を支える看護の役割、多職種連携・協働について説明する |
| 5　多様な場で生活する高齢者のその人らしい生活を支える保健・医療・福祉における看護師の役割を考察する | 1）生活機能に着目し、その人らしい生活に向けた看護実践と退院支援における看護師の役割と多職種との連携・協働について自己の考えを述べる<br>2）高齢者を生活者として捉え、高齢者を取り巻く多様な生活の場を支える看護師の役割と多職種との連携・協働について自己の考えを述べる |
| 6　看護専門職としてふさわしい態度を身につける | 1）対象者の援助に必要な知識・技術・態度を修得するための機会を積極的に求める<br>2）看護職者としてふさわしい態度・行動を示す<br>3）自身の健康管理を行い、チームの一員として行動する |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間 |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内 | 6H |
| 老年期にある対象への看護 | 県立新発田病院（病棟） | 52H |
| 施設で生活する高齢者の看護の実際 | 特別養護老人ホーム | 6H |
| 地域で生活しデイサービスを利用する高齢者の看護の実際 | デイサービスセンター | 6H |

Ⅲ　実習方法

1）　実習オリエンテーションでは、患者選定と事前学習、必要時技術演習を実施する。

2）　病棟実習では、65 歳以上の老年期にある対象を受け持ち、もてる力を活かした看護過程を展開する。

3）　特別養護老人ホーム実習では、施設で生活する高齢者への看護活動の実際を担当者に同行して見学し、見守りのもと実践する。

4）　デイサービスセンター実習では、地域で生活しデイサービスを利用する高齢者への看護活動の実際を担当者に同行して見学し、見守りのもと実践する。

5）　実習の日程

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 実習オリエンテーション（6H） | 病棟オリエンテーション | | | 看護の方向性カンファレンス |
| 6日目 | 7日目 | 8日目 | 9日目 | 10日目 |
| 看護計画カンファレンス | 看護計画カンファレンス<br>中間評価 | | 最終カンファレンス | 特別養護老人ホームまたはデイサービスセンター（6H） |
| 11日目 | | | | |
| 特別養護老人ホームまたはデイサービスセンター（6H）<br>学びのカンファレンス | 記録提出 | | | |

6）　カンファレンスの内容

カンファレンス：テーマに合わせて実践内容をもとにメンバーが意見を出し合う

（1）最終カンファレンス：病棟実習最終日に病棟にて学生・実習指導者・教員で行う。

- 実習で受け持った事例をもとに以下のテーマに合わせて実践した看護を振り返る。
- テーマ「老年期にある対象者の生活機能に着目し、その人らしい生活に向けた看護実践と退院支援における看護師の役割と多職種との連携･協働について」

（2）学びのカンファレンス：施設実習２日目に各施設にて学生・担当看護師・教員で行う。

- 特別養護老人ホームとデイサービスセンターでのケア環境と看護の役割、多職種連携・協働について振り返り、施設実習で得た学びを発表する。

Ⅳ　実習記録

老年看護学実習の様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 小児看護学実習 | 時期 | 3年次　前期･後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 科目の概要 | 子どもの成長発達、生活状況、健康状態を理解し、変化する社会の中で子どもと家族を取り巻く環境やその影響を捉え、子どもが健康に発達するために必要な看護援助について学修する。保育園･小学校での子どもとの触れ合いをとおして、乳幼児期及び学童期の子どもの成長･発達の特徴と、個別性を重視した関わりの実際を学ぶ。健康障害をもつ子どもを受け持ち、成長･発達段階及び健康状態に応じた看護の実際をとおして、子どもの最善の利益を守るための看護師の役割について学ぶ。 | | |
| 目 的 | 小児期にある対象とその家族を理解し、看護を実践するための基礎的能力を修得する | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1　乳幼児期の子どもの成長・発達の特徴と、個別性を重視した関わりの重要性を理解する | 1）乳幼児期の子どもの成長・発達の特徴を述べる<br>2）乳幼児期の子どもの日常生活行動の自立状況及びコミュニケーション能力に応じた関わりを実践する<br>3）ひとりひとりの成長・発達に応じた保育の実際を述べる<br>4）乳幼児期の子どもの成長・発達を支える保育環境を述べる |
| 2　学童期の子どもの成長・発達の特徴と、学校保健の実際を理解する | 1）学童期の子どもの成長・発達の特徴を述べる<br>2）学童期の子どもの健康課題を述べる<br>3）学童期の子どもへの健康の保持・増進活動から学校保健の実際を述べる |
| 3　入院している子どもと家族の状況が、子どもの成長発達や生活状況、家族に及ぼす影響を理解する | 1）入院に至った経緯と現在の状況を説明する<br>2）入院前の成長・発達の状況を説明する<br>3）入院に伴う日常生活行動の自立状況の変化や予測される変化を説明する<br>4）入院に伴う家族の役割の変化や影響を説明する |
| 4　入院している子どもと家族の支援に必要な基本的看護技術を修得する | 1）子どもの成長発達に合わせたかかわりを実践する<br>2）子どもの成長発達に応じた事故予防への対策を実践する<br>3）子どもの健康障害及び成長発達に合わせたバイタルサイン測定を実践する<br>4）家族の役割変化や不安に配慮したかかわりを説明する |
| 5　病棟看護師の子どもと家族へのかかわりの実際から、子どもの最善の利益を守る看護の重要性に気づきを示す | 1）子どもの意思決定を支えるかかわりに気づきを示す<br>2）子どもと家族の生活を支える看護の実際に気づきを示す<br>3）子どもの最善の利益を守る看護師の役割について記述する |
| 6　小児科外来の特徴と看護の実際を理解する | 1）治療・処置・検査の実際を見学し、必要なケアを説明する<br>2）通院治療を受けている子どもと家族への看護の役割に気づきを示す |
| 7　NICU の特徴と看護の実際を理解する | 1）NICU における子どもの看護の特徴を述べる<br>2）NICU における子どもとその家族を支える看護の役割に気づきを示す |
| 8　看護専門職としての倫理観をもったふさわしい態度を身につける | 1）子どもや家族に対し思いやりと責任ある態度でかかわる<br>2）倫理的態度で実習に臨み、必要な報告・連絡・相談を行う<br>3）主体的に実習に臨み周囲への影響を考慮した対応をする（身だしなみ、言葉使い、挨拶、約束・ルールを守る、学習、カンファレンス、心身の健康管理） |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間（日数） |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内実習 | 5 H　(1 日) |
| 健康な乳幼児の成長発達・保育の実際 | 保育園 | 13 H　(2 日) |
| 健康な学童期の成長発達・学校保健の実際 | 小学校 | 6.5 H　(1 日) |
| 健康障害を持つ小児と家族を理解し、発達段階、健康問題にあわせた看護 | 県立新発田病院（病棟） | 32.5 H　(5 日) |
| | 県立新発田病院（小児科外来） | 6.5 H　(1 日) |
| | 県立新発田病院（NICU） | 6.5 H　(1 日) |

Ⅲ　実習方法

1）保育園実習では、子どもたちと触れ合い、様々な発達段階にある子どもと個別性に合わせた保育の実際を学ぶ。

2）小学校実習では、授業参観やふれあいをとおして、学童期の子どもの成長・発達や発達課題を学び、養護教諭から学校保健の実際について説明を受ける。

3）小児病棟実習では、健康障害を持つ子ども（0～15 歳）を受け持ち、入院が子どもと家族へ及ぼす影響を考えながら、子どもの成長発達に応じた関わりを実践する。また、看護師のかかわりを見学し、子どもの最善の利益を守る看護の重要性を学ぶ。

4）小児科外来実習では、小児科外来の特徴と、看護の実際を見学する。

5）NICU 実習では、NICU の特徴と看護の実際を見学する。

6）実習の日程（各実習グループにより日程が異なる）。

| 1 日目 | 2 日目 | 3 日目 | 4 日目 | 5 日目 |
|---|---|---|---|---|
| 学内オリエンテーション（5H）<br>・事前課題・自己学習の確認・DVD 視聴、技術演習（必要時） | 保育園 | 保育園 | 小学校 | NICU または小児科外来 |
| 6 日目 | 7 日目 | 8 日目 | 9 日目 | 10 日目 |
| 病棟オリエンテーション<br>患児を受け持つ | 毎日の実習記録 → | | | 最終カンファレンス |
| 11 日目 | | | | |
| 小児科外来または NICU | 記録提出 | | | |

Ⅳ　実習記録

小児看護学実習の様式による

Ⅳ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 母性看護学実習 | 時期 | 3年次　前期･後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70 時間)、11 日間 |
| 科目の概要 | 妊娠期の看護では妊婦健康診査･保健指導の見学を通し、妊婦の身体的･心理的･社会的側面の看護を学ぶ。分娩期の看護では経腟分娩･帝王切開術の経過から産婦の身体的･心理的変化とその看護を学ぶ。産褥期･新生児期の看護では褥婦、新生児を受け持ち、母児を一体化してとらえ看護過程を展開し、セルフケア能力を活かした看護を実践する。多職種連携、社会資源活用の必要性を理解し家族を含めた対象への看護の役割･機能を学ぶ。 | | |
| 目 的 | 妊娠期･分娩期･産褥期･新生児期にある対象と家族を理解し、看護を実践するための知識、技術、態度を修得する | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1 妊婦と家族を理解し、妊娠期に必要な看護を説明する | 1）妊娠に伴う身体的変化を説明する<br>2）妊婦の心理・社会的変化を説明する<br>3）妊婦健康診査および保健指導の目的・意義を説明する |
| 2 産婦と家族を理解し、分娩期に必要な看護を説明する | 1）産婦の身体的変化を説明する<br>2）分娩各期および帝王切開術に関連した看護を説明する<br>3）分娩室の設備・構造・環境の目的・特殊性を説明する |
| 3 褥婦と家族を理解し、対象に必要な看護を実践する | 1）褥婦の身体的変化を説明する<br>2）褥婦の心理・社会的変化を説明する<br>3）妊娠期・分娩期および産褥経過の情報を収集する<br>4）収集した情報を統合しアセスメントする<br>5）対象の母児を一体化して捉え、必要な看護を明確にする<br>6）対象の個別性を踏まえた看護計画を立案する<br>7）計画した看護を対象のセルフケア能力を考慮し実践する<br>8）実践した内容を振り返り評価する<br>9）産褥期における指導の目的・意義を説明する |
| 4 新生児と家族を理解し、新生児期に必要な看護を実践する | 1）新生児の身体的特徴を説明する<br>2）新生児に必要な看護・処置・検査・治療を見学し目的・意義を説明する<br>3）胎児期・出生時新生児経過の情報を収集しアセスメントする<br>4）安全安楽に配慮して看護技術を実践する |
| 5 母性看護の対象と母性保健について説明する | 1）母性看護の対象と多職種連携、看護の役割・機能について説明する<br>2）母性保健に関連する社会資源について説明する<br>3）母性看護学実習を通して自らの体験をふまえて学んだことを、引用・参考文献を用いて考察し、記述する |
| 6 看護専門職として相応しい態度で実習に臨む | 1）対象や家族に対し思いやりと責任ある態度で関わる<br>2）倫理的態度で実習に臨み、必要な報告・連絡・相談を行う<br>3）主体的に実習に取り組み、メンバーシップを発揮する |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間（日数） |
|---|---|---|
| オリエンテーション<br>母性看護技術演習 | 学内 | 5H（1日） |
| 妊娠期の看護 | 県立新発田病院（産科外来） | 6.5H（1日） |
| 分娩期にある対象の看護<br>産褥期にある対象の看護<br>新生児期にある対象の看護 | 県立新発田病院（病棟） | 52H（8日） |
| 学内実習<br>テーマカンファレンス | 学内 | 6.5H（1日） |

Ⅲ　実習方法

1）1日目は学内で技術演習（妊婦の腹囲・子宮底測定、レオポルド触診法、褥婦の子宮復古の観察、新生児の沐浴）を行う

2）病棟実習では対象を受け持ち、看護過程を展開し看護を実践する

（1）受け持ち対象は1組の褥婦と新生児

（2）褥婦・新生児を受け持つことができない場合は入院中の妊婦または産婦

3）受け持ち対象がいない場合は同行実習をする

4）実習期間中の1日は産科外来で妊婦健康診査、保健指導を見学する

5）11日目は学内実習をする

（1）ロールプレイング（褥婦への指導）

（2）テーマカンファレンス

6）実習の日程

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 | 5日目 |
|---|---|---|---|---|
| 学内オリエンテーション<br>学内母性看護技術演習<br>（5H） | 病棟オリエンテーション<br>受け持ち実習開始<br>外来オリエンテーション | | 受け持ち３日目<br>看護の方向性カンファレンス | 受け持ち４日目<br>看護計画カンファレンス |
| 6日目 | 7日目 | 8日目 | 9日目 | 10日目 |
| 産科外来実習<br>（実習期間中の1日間） | 中間評価 | | | 最終カンファレンス |
| 11日目 | | | | |
| 学内<br>ロールプレイング<br>テーマカンファレンス | 記録提出 | | | |

7）テーマカンファレンスの内容

テーマカンファレンス：テーマに合わせて実践内容をもとにメンバーが意見を出し合う

・実習最終日（学内日）に学内で学生・教員で行う。

・受け持った事例をもとに以下のテーマを参考に、グループで深めたいテーマを検討する。

・カンファレンス前に各自必要な資料を準備する。

・グループリーダーがメンバーと話し合いテーマを決め前日までに教員に報告する。

【テーマの例】

〇正常な分娩・産褥経過をたどるための妊娠期の介入

〇セルフケア能力を活かす指導とは

〇分娩を振り返る意義

〇母児相互作用を高めるには

〇家族再構築の支援

〇社会資源を有効に活用するには

Ⅳ　実習記録

母性看護学実習の様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 精神看護学実習 | 時期 | ３年次 前期 後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 2単位(70時間)、11日間 |
| 科目の概要 | 精神看護学の知識・技術を活用して精神科病棟および施設で実習を行う。<br>病棟実習では、精神障害により生じる様々は影響をふまえて、障害とともにその人らしく生きることを支えるために必要な看護について学ぶ。施設実習では、精神障害をもちながら、その人らしく地域で生活を送るために必要な社会資源やサービスや精神に障害のある人を支える医療チーム(多職種)との連携について学ぶ。 | | |
| 目 的 | 精神に障害のある対象とその家族を理解し、健康上の課題が日常生活に及ぼす影響を把握し、対象がその人らしく生活するために必要な看護を実践するための基本的な知識・技術・態度を修得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1　精神に障害のある対象とその家族を理解する | 1）対象を身体的側面から説明する<br>2）対象を心理的・社会的側面から説明する<br>3）対象とその家族のかかわりの経過を説明する<br>4）対象の入院形態とその法的根拠を説明する<br>5）精神障害・精神症状が日常生活に及ぼす影響を記述する<br>6）対象の受けている治療が日常生活に及ぼす影響を記述する<br>7）治療的環境が対象に与える影響を説明する |
| 2　精神に障害のある対象の健康課題を把握し、自立に向けた看護を実践する | 1）精神症状・日常生活・社会的背景等収集した情報を関連づけて解釈・分析する<br>2）対象が抱える健康課題を抽出する<br>3）達成可能で具体的な看護目標を設定する<br>4）対象の強みを生かした援助を実施する<br>5）精神症状を考慮した援助を実施する<br>6）対象の自立性・継続性を尊重した援助を実施する<br>7）人権を考慮した安全・安楽な援助を実施する<br>8）実施した援助の結果や対象の反応を述べる<br>9）実施した看護を評価・修正し記述する |
| 3　プロセスレコードを用いて自己を振り返り、自分の対人関係の傾向と特徴を考察する | 1）対象の反応・言動と自己の言動・感情の意味を記述する<br>2）対象と自己の言動・感情が相互に影響していることを記述する<br>3）対象との対人関係における自己の傾向・特徴を考察する |
| 4　精神に障害のある対象が地域で生活するための支援について理解する | 1）サービスを利用している対象の生活状況について述べる<br>2）地域で生活する対象への支援について述べる<br>3）社会復帰に向けた多職種連携の実際と看護の役割について自己の考えを述べる |
| 5　看護専門職としてふさわしい態度を身につける | 1）看護チームの一員としての自覚をもち、看護師を主とする医療スタッフや教員、グループメンバーとの報告・連絡・相談を実施する<br>2）体調を管理し、欠課・欠席がない<br>3）自らの課題解決に向け、主体的に学習し続ける |

Ⅱ　実習構成

| | 実 習 場 所 | 実習時間（日数） |
|---|---|---|
| 学内実習 | 学内 | １2H（2日） |
| 精神に障害のある対象の看護 | 県立新発田病院（病棟） | ４8H（7．5日） |
| 地域で生活する精神に障害のある対象への支援 | 県立新発田病院（デイケア） | 4H（0．5日） |
| | 障害福祉サービス事業所 | 6H（1日） |

Ⅲ　実習方法

1）学内実習（1日目）では、実習オリエンテーション（病棟・施設の概要や注意点等）を実施するとともに、受け持ち患者情報に基づき、自己学習内容の確認および実施を行う。

2）病院実習では、対象を受け持ち、強み・持てる力を活かしながら看護過程を展開する。

3）デイケア・障害福祉サービス事業所では、利用者への支援の実際を見学し、可能な範囲で活動への参加やコミュニケーション等により、利用者の生活状況や思いを知る。

4）学内実習（１１日目）では、病棟実習で受け持った事例を用いて、対象が安心してその人らしく暮らすことができるよう、医療・障害福祉・介護、住まい、社会参加（就労など）地域で生活するために必要な支援と看護の役割について考え、グループメンバーで意見交換を行う。（多職種連携含む）

5）実習日程及び内容

※　病棟実習②～⑧の間に、デイケア実習（午前のみ）があります。

| 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 |
|---|---|---|---|
| 学内実習（6H）<br>・実習ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ<br>・事前学習・自己学習の確認<br>・受け持ち患者の概要 | 病棟実習①（6.5H）<br>・病棟ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ<br>・受け持ち患者の情報収集や援助の実際の見学 | 病棟実習②（6.5H） | 病棟実習③（6.5H）<br>・看護の方向性ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ |
| 5日目 | 6日目 | 7日目 | 8日目 |
| 病棟実習④（6.5H）<br>・看護計画ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 病棟実習⑤（6.5H） | 病棟実習⑥（6.5H） | 病棟実習⑦（6.5H） |
| 9日目 | １0日目 | １1日目 | |
| 病棟実習⑧（6.5H）<br>・学びのｶﾝﾌｧﾚﾝｽ | 障害福祉サービス事業所（6H） | 学内実習（6.5H）<br>・障害福祉ｻｰﾋﾞｽ事業所の概要<br>・地域で生活するために必要な支援と看護の役割について（まとめと意見交換） | 記録提出 |

Ⅳ　実習記録

精神看護学実習の様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する

| 科目名 | 統合実習 | 時期 | 3年次 後期 |
|---|---|---|---|
| 担当者 | 看護師として５年以上の実務経験を有する専任教員 | 単位(時間)、日数 | 3単位(105時間)、15日間 |
| 科目の概要 | 本実習は、領域別実習を終えた後、看護師の実務に近い形で看護を実施することを体験し、臨床へつなげるものである。具体的には、時間を意識して1日の行動計画を立案する思考や状況判断力の基盤を学び、複数患者の受け持ちを通し、優先順位を考え、患者に必要な援助を実践する。また、チーム医療及び他職種との協働の中で看護師としてのメンバーシップ及びリーダーシップを理解すること、 看護をマネジメントできる基礎的能力を身につけること、医療安全の基礎的知識を修得する。そして、看護専門職業人としての自己の課題を明確にするとともに、自己研鑽する能力を養うものとする。 | | |
| 目 的 | チーム医療を担う看護専門職業人としての役割と責任を自覚し、既修の知識、技術、態度を統合しながら看護業務遂行におけるタイムマネジメントと役割分担、優先順位を考えた看護実践能力を修得する。 | | |

Ⅰ　実習目標・行動目標

| 実 習 目 標 | 行 動 目 標 |
|---|---|
| 1　看護管理・病棟管理の実際を理解する | 1）病院組織における看護管理の実際について記述する<br>2）病棟管理者の役割から看護サービスのマネジメントの実際について記述する<br>3）看護サービスのマネジメントにおける自己の考えを記述する |
| 2　看護チームのリーダーおよびメンバーの役割を理解する | 1）チームにおけるリーダーの役割からリーダーシップの実際について記述する<br>2）チームにおけるメンバーの役割からメンバーシップの実際について記述する<br>3）リーダーシップ・メンバーシップの実際をふまえて自己の役割と課題を記述する |
| 3　看護実践における臨床判断の思考過程の実際について理解する | 1）看護師の看護ケア場面における臨床判断過程の実際を記述する<br>2）看護師の臨床判断過程の実際をふまえて自己の考えを記述する |
| 4　複数の患者を受け持ち、優先順位・時間管理をふまえ、患者の個別性に合わせた看護を実践する | 1）受け持ち患者の病態・病状をアセスメントし、看護の方向性を記述する<br>2）受け持ち患者の看護援助について、優先度と時間管理を考慮して１日のスケジュールを計画する<br>3）状況に応じたスケジュール修正の理由・根拠を述べる<br>4）状況に応じて看護師と援助の調整をする<br>5）状況に応じた援助の追加・修正をする<br>6）時間管理を考慮した援助をする<br>7）受け持ち患者の病態・病状に合わせて安全・安楽・自立を考慮した援助を実践する<br>8）援助における応援・協力を要請する<br>9）状況変化に合わせて報告・連絡・相談する<br>１０）実施した援助を客観的・多角的に評価し、翌日の援助につなげる |
| 5　病棟における医療安全管理体制と具体策を理解する | 1）組織における医療安全体制の実際について記述する<br>2）病棟で行われている医療安全対策の実際について記述する<br>3）組織の医療安全対策に基づき行動する<br>4）病棟の医療安全の取り組みをふまえて医療安全について自己の考えを記述する |
| 6　療養を継続するための医療・看護組織のシステムと地域および専門職間の連携の実際を理解し、チーム医療における看護の役割と機能を理解する | 1）一貫性・継続性ある看護ケアの提供システムについて記述する<br>2）地域連携および専門職間連携の実際を理解し、看護の役割・機能について記述する<br>3）患者サポートセンターの設置背景・役割・機能を理解し、継続看護の必要性について自己の考えを記述する |
| 7　専門職業人として主体的に学習し、倫理に基づいた責任ある看護を実践する | 1）看護の倫理に基づき看護を実践する<br>2）看護チームの一員として、責任を自覚した態度・行動がとれる<br>3）自らの課題解決に向けて、主体的に学習し続ける<br>4）実習での学びを振り返り、今後の課題や目標について述べる |

Ⅱ　実習構成

| 実習内容 | 実習場所 | 実習時間 |
|---|---|---|
| 実習オリエンテーション | 学内 | ６．0H |
| 統合実習のまとめ | | ６．0H |
| 看護組織における看護と臨床判断の実習 | 県立新発田病院（病棟） | ３７．５H |
| 複数受け持ちの実習 | 県立新発田病院（病棟）および学内 | ４５．0H |
| 入退院支援と継続看護実習 | 県立新発田病院（患者サポートセンター）および学内 | １０．５H |

Ⅲ　実習方法

1）病棟実習は「看護組織における看護と臨床判断の実習」「複数受け持ちの実習」「入退院支援と継続看護実習」を実施する。

①　看護組織における看護と臨床判断の実習では、看護師長・リーダー・スタッフと行動を共にし*、看護チームの各職種の役割と責任、チームワークの実際の場面を見学し、１つ１つの行動に対する根拠（何のために行うのか、何のための配慮・工夫なのか等）について考える。

＊　同行実習ではなく、シャドウ実習である。
シャドウ実習とは、ロールモデルとなる看護師の行動や言動、態度、現場の雰囲気など全体を広く観察することを指す。

②　複数受け持ちの実習では、２名の患者を受け持ち、病棟で立案されている看護計画に基づき安全・安楽な看護を実践する。看護チームの一員として役割と責任をもって行動するよう、受け持ち患者の状態や治療・処置等の予定はもちろん、チーム及び病棟の動きや予定等をふまえて受け持ち患者間における１日のスケジュールを調整する。

③　入退院支援と継続看護実習では、県立新発田病院患者サポートセンタースタッフによる講義・演習を行った後、看護活動の実際について担当者に同行・見学する。

2）学内実習は、実習オリエンテーションの他に「対象理解」「統合実習のまとめ（グループワーク・発表）」を実施する。

①　対象理解では、収集した患者情報（疾患：現疾患および既往歴・治療・検査・日常生活の状況）を整理し、病棟で立案されている看護問題・看護計画をふまえて対象の全体像・看護の方向性を考える。

②　統合実習のまとめ（グループワーク・発表）では、既修の知識や統合実習での実践をふまえ、「看護チームの一員として働くために必要なこと」「安全な医療への取り組み」について考察し、今後の自分の課題を明確にする。

3）実習日程及び内容については【別記】参照

Ⅳ　実習記録

統合実習の様式による

Ⅴ　実習評価

実習評価表に基づき評価する